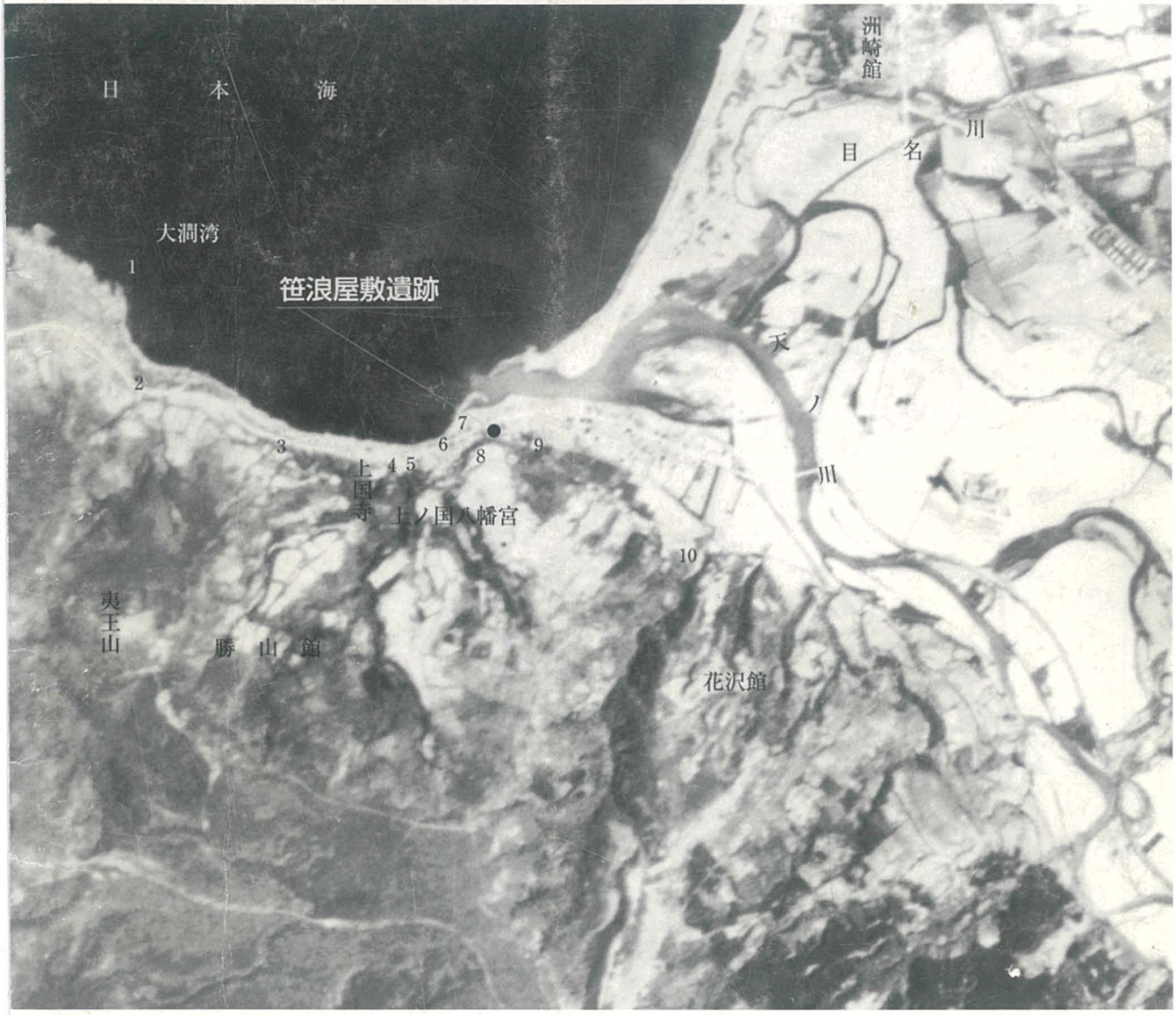
笹浪屋敷遺跡

―上ノ国市街地遺跡発掘調査概報Ⅰ―



1996・3

上ノ国町教育委員会

序

天ノ川河口付近の左岸から河口の西側には字上ノ国の市街地が形成されています。

この地区は江戸時代の前期からすでに戸数百四、五十と記されており、古くから集落が形成されていたと推測されています。

昭和36年、上ノ国村と村教育委員会はこの地区の「竹内屋敷遺跡」の発掘調査により縄文時代晩期の「上ノ国式土器」や擦文土器、珠洲焼の壷などが出土したことを報告しました。

近年、国史跡上之国勝山館跡の発掘調査が進むに従い、直下のこの地区には城下町がつくられていた筈だとの指摘を歴史学の諸先生から受けるようになりました。

一昨年、こうした過去の実績と近年の指摘に応えるかのように、竹内屋敷遺跡の国道を挟んだ向かい側、20m程東よりに住む笹浪甲衛氏から住宅の新築計画と調査への協力の申し出がありました。

一部試掘調査で江戸時代以前の陶磁器が見つかり、北海道教育委員会の指導を仰いだ結果、「笹浪屋敷遺跡」として文化財保護法が適用されることとなりました。

平成７年９月、文化庁の補助事業として発掘調査を実施したところ、縄文時代、擦文時代、勝山館の時代、江戸時代の遺物や遺構が発見され、過去の調査や諸先生のご指摘の正しさがあらためて示されるところとなりました。

三十数年振りに行われた上ノ国市街地での発掘調査は新しい発見の積み重ねをもたらすとともに更にいくつかの重要な課題を示すところとなりました。

町教育委員会は遺跡のより精密な分布状態を把握することがまず第一に必要なことと考えるところです。それとともに、地域の皆さんのご理解とご協力を得ながら私たちのまちの先人の辿ってきた足跡を少しずつ明らかにしなければと願うところです。

平成８年３月

上ノ国町教育委員会

教育長　和　泉　定　夫

本文目次

序
本文目次
例言

Ⅰ　遺跡の位置及び周辺の環境…… 1
Ⅱ　調査の状況…… 2
　1.調査に至る経緯
　2.調査の方法
Ⅲ　調査の概要…… 5
　1.検出遺構
　2.基本層序
Ⅳ　遺構確認調査…… 6
　1.近世の遺構と遺物…… 6
　2.擦文時代の遺構と遺物…… 9
　3.縄文時代の遺構と遺物……14
Ⅴ　調査区内出土遺物……16
　1.近世陶磁器
　2.中世陶磁器
Ⅵ　まとめ……19
　1.縄文時代の遺物と遺構
　2.擦文時代の遺物と遺構
　3.中世後半の遺物と遺構
　4.近世の遺物と遺構
　5.「上ノ国遺跡」調査の課題

挿図目次

第１図　遺跡周辺地形と遺跡位置図及び
　　上ノ国市街地の中近世遺物出土地点と
　　その遺物…… 2
第２図　調査区土層堆積図…… 3
第３図　調査区遺構配置図…… 7
第４図　土壙7・8・23平面図他①……10
第５図　土壙7・8・23平面図他②……11
第６図　土壙13出土遺物……12
第７図　土壙13擦文期土壙墓平面図他……13
第８図　土壙16平面図他……15
第９図　調査区出土遺物(中世陶磁器)……16
第10図　調査区出土遺物(近世陶磁器他)……17
第11図　調査区出土遺物(擦文土器・縄文土器) 18

表目次

表１　第3・6・9・12グリッド南北セクション
　　西壁土層〈SPA-SPA'〉…… 4
表２　第10・11・12グリッド東西セクション
　　北壁土層〈SPB-SPB'〉…… 5
表３　第6グリッド焼土5・6・9南北セクション
　　西壁土層〈SPA-SPA'・SPB-SPB'〉 … 9
表４　第4グリッド土壙13東西セクション
　　南壁土層〈SPA-SPA'-SPA"〉……14
表５　第4・5グリッド土壙16南北セクション
　　東壁土層〈SPA-SPA'〉……15

引用・参考文献……22

写真図版目次

ＰＬ．１　遺構検出状況・遺物出土状況
ＰＬ．２　土壙13（擦文土壙墓）検出状況・出土
　　遺物
ＰＬ．３　出土遺物（中世陶磁器他）
ＰＬ．４　出土遺物（擦文土器・縄文土器）

例　言

1　本書は平成７年に行われた上ノ国市街地遺跡・傘笹浪屋敷遺跡の発掘調査概報である。

2　当遺跡は檜山郡上ノ国町字上ノ国211に位置する。

3　調査は９月１日から10月24日まで行い、面積約240㎡を実施した。

4　調査は次の体制でのぞんだ。

調査主体者　上ノ国町教育委員会
教育長　和泉定夫
主管　文化財課長　木村幹郎
博物館設立推進係長　笹浪甲衛
発掘担当者　松崎水穂
調査員　柳沼弥生　斉藤邦典　佐藤一志　松田輝哉　久末久義（上ノ国町郷土館資料調査専門員）
調査補助員　山崎洋子　徳本悟（奈良大学）　中田書矢　石井純平　春名理史（富山大学）
調査作業員　小田川喜美子　川合冴子　笹浪竹志　佐藤則子　鈴木千春　八田綾子　目黒加奈子　森恵美子　鷲田フミ子

3　本書の編集は松崎、柳沼が協議の上、柳沼が行った。
本書の作成は本文Ⅰ～Ⅴ・表を柳沼、図版を柳沼、山崎、他を松崎の分担で行った。

4　挿図の作成は担当者、調査員の指示により、補助員、作業員が行った。挿図中の方位は真北を示す。

5　土層の土色は「新標準土色帳」（農林水産技術会議事務局）を用い目測で比定した。

6　出土資料は上ノ国町教育委員会で保管する。

7　調査に当たっては次の関係機関と各位に多大なご指導とご援助を賜った。
文化庁記念物課　小池伸彦　本中眞　北海道教育庁文化課　大沼忠春　種市幸生　札幌医科大学　石田肇　奈良大学　植野浩三　京都大学　片山一道　北海道開拓記念館　赤松守雄　右代啓視　奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター　沢田正昭　加藤允彦　肥塚隆　北海道埋蔵文化財センター　越田賢一郎　福井県埋蔵文化財センター　水野和雄　瀬戸市埋蔵文化財センター　藤澤良祐　金子健一　八雲町教育委員会　三浦孝一　乙部町教育委員会　森広樹　藤田巧　松前町教育委員会　前田正憲　七飯町教育委員会　横山英介　函館市教育委員会　佐藤智雄　五十嵐貴久　浪岡町教育委員会　工藤清泰　波佐見町教育委員会　中野雄二　波佐見町商工企画課　山口浩一　上ノ国町立診療所　経田吉郎　草間光郎　久末キミ子　京谷昌治　小山内一次　久末イト　川合正義　滝本肇　上野達雄　㈲ヨコノ印刷　東北芸術工科大学学生　岩井良太
（敬称略　順不同）

Ⅰ　遺跡の位置及び周辺の環境

上ノ国町は渡島半島の南西端に位置する。北は江差町、南に大千軒岳を挟んで松前町、東に袴腰岳を挟んで木古内町と接している。市街地は天ノ川付近の平野部を中心として広がり、その他の集落は海岸沿いや山間部などの平野部に点在している。河口付近の日本海沿岸は、無碇と呼ばれる天然の良港である。かつてこの地は鰊漁が盛んであり、年に一度群来る鰊を求める人々で賑わった場所であった。また、この無碇地区は、蝦夷交易の一大拠点をなした武田・蠣崎氏の居館勝山館の経済を支えた町屋の中心部ではないかといわれる所でもある。

当遺跡はこの無碇地区、天ノ川河口付近に形成された砂丘上に位置している。付近には晩期上ノ国式土器、擦文土器と12～13世紀頃の珠洲焼壺を出土した竹内屋敷遺跡、重要文化財であり、平成６年度の遺跡確認調査で瀬戸・美濃大窯Ⅰ期の碗を出土した旧笹浪家がある。（第1図）

Ⅱ　調査の状況

１.調査に至る経緯

笹浪甲衛氏の住宅新築に伴い、平成6年に遺跡確認調査を行った。その結果、敷地内に江戸期の擂鉢等の遺物、江戸期、江戸期より以前、擦文期の包含層が存在することが確認された。この調査結果に基づき、北海道教育委員会との協議を行ったが、工事計画変更が不可能であることが明らかであるため、平成7年9月1日から敷地内の工事該当地区240㎡の発掘調査を行う運びとなった。

２.調査の方法

表土剝ぎと平行してグリッド設定を行った。敷地境界の西側ラインを基準として、北に向かって西から1・2・3・・・と4mおきに設定し番号をふった。調査は、排土置き場を確保するために第13・14・15グリッドのラインから北側を先に調査し、10月19日以降残りの南側の調査を行った。

建物の基礎の溝を利用して第3グリッド～第15グリッドのラインにメインセクションベルトを設定し、層を観察しながら掘り下げていき、土壙などで、明らかに近世の攪乱と判断されるものは遺物も一括取り上げとした。遺跡は近世以降の削平等による攪乱を受けている部分が多く、遺物、遺構の層位毎の発掘は困難を極めた。

9/16　Ⅰ層及び攪乱部分の除去終了、近世の遺構を検出するために精査を行う。石の詰まった溝１（土台溝）、木枠の残る溝２を検出した。

9/30　Ⅱ層を除去した時点で土壙13のプランを検出した。セクションを取るために半裁したところ、人骨らしきものが確認された。

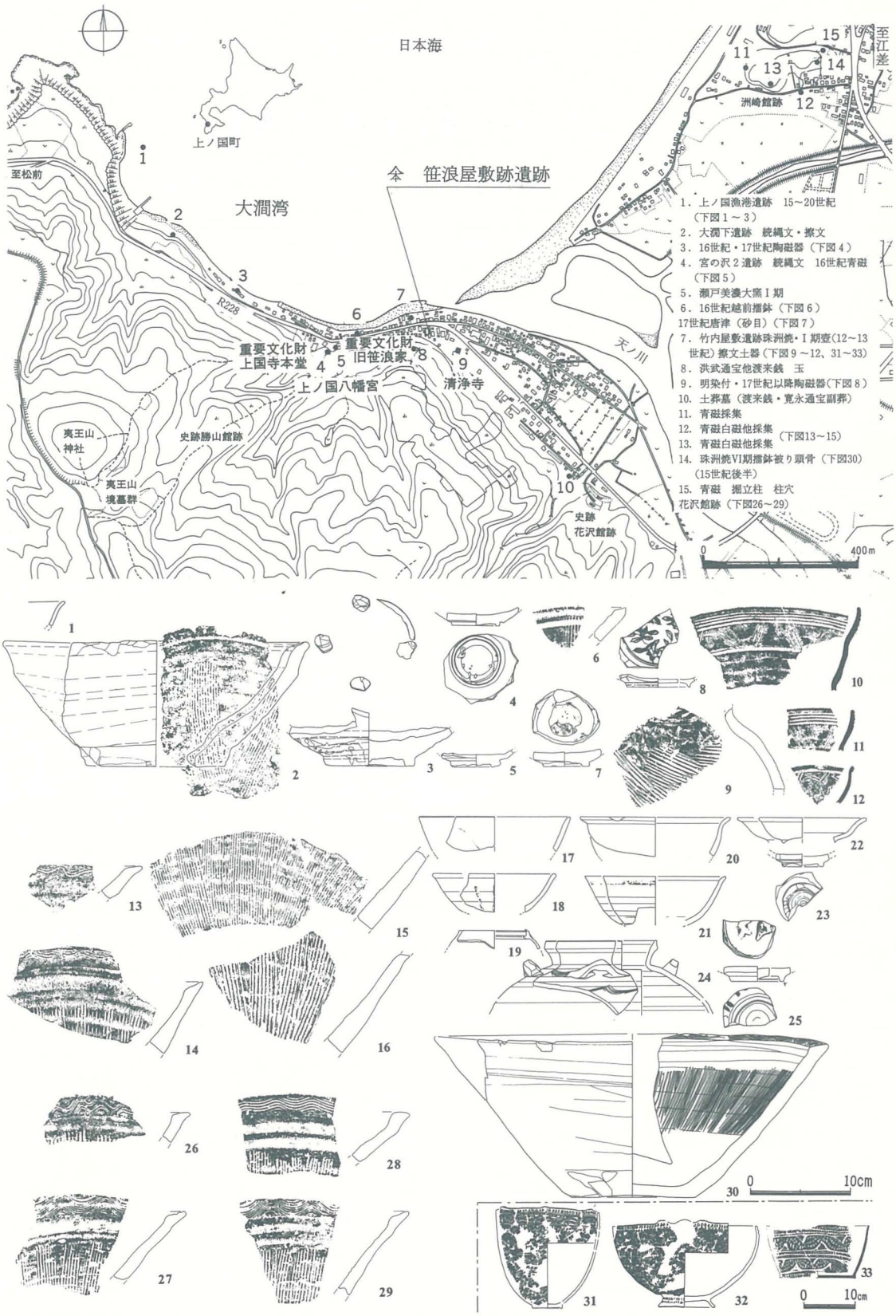
10/4　Ⅳ層面を精査中、覆土中に縄文土器を伴う土壙16のプランを検出する。

10/8　現地説明会を開催する。町内外より80人ほどの参加者があった。

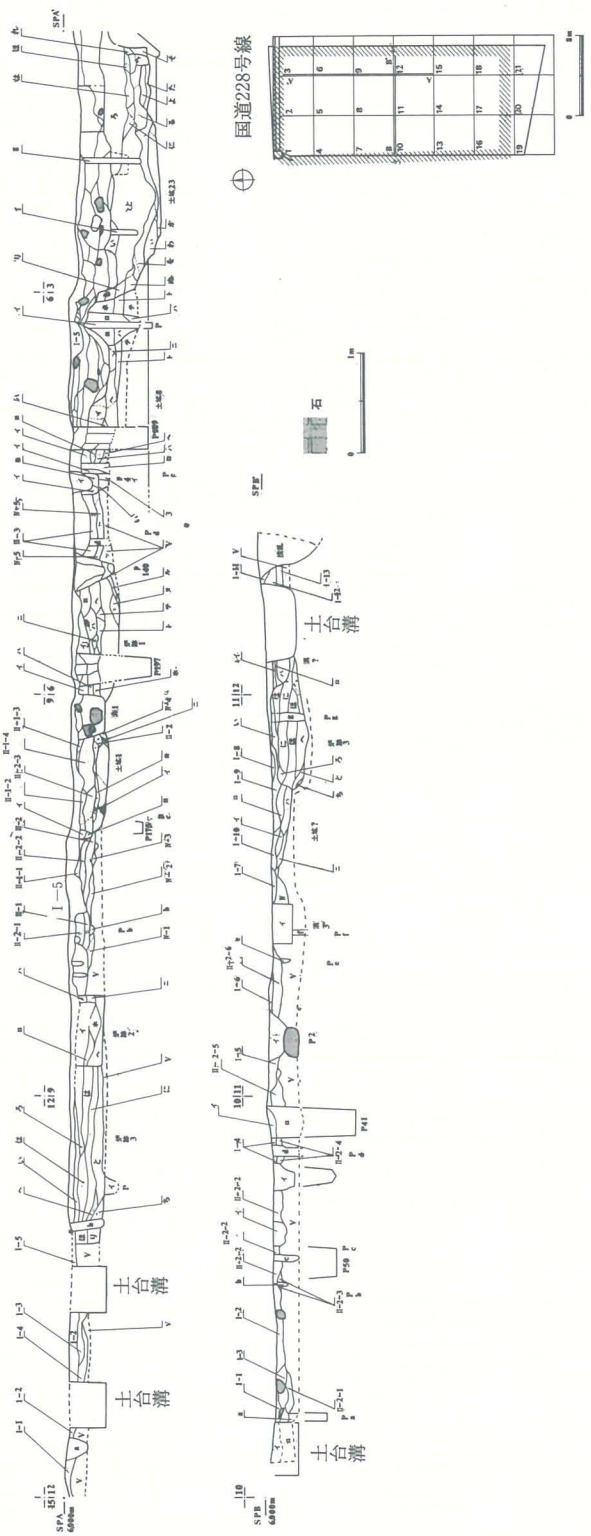
10/19　人骨の状態が不安定なため、業者による取り上げを行う。

北半部の調査終了。直ちに南半部の調査にはいる。

10/23　発掘区すべての調査を終了。用具の点検、埋め戻しを終え、当遺跡の調査を終了した。



第1図　遺跡周辺地形と遺跡位置図及び上ノ国市街地の中近世遺物出土地点とその遺物
（付　縄文晩期上ノ国式土器）―「歴史を生かすまちづくりの集い」(1995）資料に加筆作成―



第２図　調査区土層堆積図（SPA—SPA′ SPB—SPB′）

表１．第３、６、９、12グリッド南北セクション西壁土層〈SPA-SPA'〉

Ⅰ	1	10YR4/3	鈍い黄褐色	礫粒５％・ローム粒３％	砂質・粘性無し・ハード	
	2	10YR7/6	明黄褐色	礫・礫粒30％	粘性無し・ハード	銚土粒３％
	3	10YR4/3 ＋10YR4/2	鈍い黄褐色＋灰黄褐色	砂・礫粒・ローム粒５％	ハード	
	4	10YR3/4	暗褐色	砂		炭微量
	5	10YR7/4	鈍い橙色	礫・礫粒25％	砂質・粘性無し・ハード	
Ⅱ―１	1	10YR2/2	黒褐色	細粒砂・黒色細粒砂１％	やや密・ハード	
	2	10YR2/2	黒褐色	細粒砂	密・ややソフト	炭粒少量
	3	10YR3/3 ＋10YR2/1 10％	暗褐色＋黒色	細粒砂	密・ハード	炭粒少量
	4	10YR1.7/1 ＋10YR4/3 5％	黒色＋鈍い黄褐色	細粒砂	密・ややハード	炭粒少量
Ⅱ―２	1	10YR3/2	黒褐色	細粒砂・黒色砂やや混	しまり有り・ややハード	黄白色火山灰やや混
	2	10YR2/2	黒褐色	細粒砂・白色火山灰80％	密・ハード	炭粒微量
	3	10YR2/2 ＋10YR6/4 10％	黒褐色＋鈍い黄橙色	細粒砂・10YR8/2灰白色火山灰微量	密・ややソフト	
	4	10YR2/3 ＋10YR1.7/1	黒褐色＋黒色	細粒砂・10YR8/3灰白色火山灰微量	密・ややソフト	
Ⅲ	1	10YR2/2	黒褐色	細粒砂・褐色砂粒やや混	やや密・ややハード	
	2	10YR1.7/1	黒色	細粒砂・赤褐色粒微量	密・ハード	
	3	10YR2/2 ＋10YR4/6 少量	黒褐色＋褐色	細粒砂・礫粒少量	密・ハード	
Ⅳ	1	10YR3/4	暗褐色	細粒砂・白色砂粒極微量混	しまり有り・ややハード	
	2	10YR2/3	黒褐色	細粒砂・黄褐色砂混	やや密・ハード	炭粒極微量混
	3	10YR3/2	黒褐色	細粒砂・黄褐色砂混・黒色砂粒極微量混	やや密・ややソフト	
	4	10YR3/2 ＋10YR6/6 微量	黒褐色＋明黄褐色	細粒砂・黒色砂粒混	密・ハード	
	5	10YR2/2 ＋7.5YR3/4	黒褐色＋暗褐色	細粒砂・黒色砂・褐色砂混	密・ややハード	
Ⅴ		10YR4/3	鈍い黄褐色	細粒砂・黒色砂粒微量混	密・ハード	
小柱穴	a	10YR3/3	暗褐色	砂粒・ローム粒・火山灰微量	ハード	腐食木質20％
	b	10YR3/2 ＋10YR5/6	黒褐色＋黄褐色	砂・ローム粒３％・礫粒多量	やや粗・ややソフト	
	c―イ	10YR3/3	暗褐色	砂利（２～３㎜）・褐色砂粒少量	粗	
	c―ロ	10YR2/3	黒褐色	砂・極小礫粒・黒色砂粒少量	粗・ソフト	
	d	10YR3/2	黒褐色	砂・礫粒多量	粗・ソフト	炭粒混
	e―イ	10YR4/2	灰黄褐色	砂・礫粒80％	粗・ややソフト	
	e―ロ	10YR2/1	黒色	やや細粒砂・礫粒少量	やや密・ハード	
	f	注記無し				
	g	注記無し				
炉跡①	イ					
	ロ	注記無し				
	ハ					
炉跡②	い	10YR3/3	暗褐色	砂・礫粒５％・ローム30％	ハード	
	ろ	10YR3/4	暗褐色	砂・礫粒40％・ローム10％	ハード	
	は	10YR3/3	暗褐色	砂・礫粒５％	やや密・ややソフト	粘土ブロック・炭粒各10％
	に	10YR3/3	暗褐色	砂・砂利微量・ローム粒・ロームブロック	ハード	
	ほ	10YR3/4	暗褐色	砂・ローム粒極少量	湿性有り・ややハード	
	へ	10YR3/4	暗褐色	砂・木腐植土40％	ソフト	
	と	10YR3/3	暗褐色	砂・礫粒・ローム粒微量	ややソフト	炭粒５％
	ち	10YR3/3	暗褐色	砂		
	り	10YR4/3 ＋10YR3/4	鈍い黄褐色＋暗褐色	砂・ローム粒		
炉跡③	イ	注記無し				
	ロ	10YR3/2	黒褐色	砂・礫粒（２～５㎜・１㎝）多量	やや粗・ややハード	５YR5/4銚土粒30％・炭粒微量
	ハ	10YR2/3 ＋10YR5/6 20％	黒褐色＋黄褐色	砂・礫粒（２～３㎜）多量・10YR2/3黒褐色砂粒５％	やや粗・ややソフト	５YR4/6銚土粒30％・炭粒少量
	ニ	10YR3/2	黒褐色	砂・礫粒（２～３㎜）微量・10YR2/3黒褐色砂粒微量	やや密・ややソフト	
	ホ	10YR3/2	黒褐色	砂・礫粒（２～３㎜）微量	やや密・ソフト	５YR4/6銚土粒微量
	ヘ	10YR3/2	黒褐色	砂・礫粒（２～３㎜・１㎝）	やや密・ややハード	５YR5/8銚土粒微量
	ト	10YR3/2	黒褐色	砂・礫粒（２～３㎜・１㎝）多量	粗・ソフト	10YR5/6銚土粒10％
	チ	10YR2/2	黒褐色	砂・礫粒（２～３㎜）微量	やや粗・ソフト	炭ブロック
	リ	10YR2/2	黒褐色	砂・礫粒（２～３㎜）多量	やや粗・ややハード	木質微量・貝片（？）微量
	ヌ	10YR2/3	黒褐色	砂・礫粒（２～３㎜）少量	やや密・ソフト	
	ル	10YR2/2 ＋10YR3/2 ＋10YR4/4	黒褐色＋褐色	やや細粒砂・礫粒（２～３㎜）微量	やや粗・ややハード	炭粒混
溝２	イ	10YR2/3 ＋10YR2/2 10％	黒褐色	砂・小礫粒（～２㎜）少量	やや粗・ソフト	
	ロ	10YR2/1 ＋10YR4/3 30％	黒色＋鈍い黄褐色	やや細粒砂・礫粒（２～３㎜）少量	密・ややハード	
189		注記無し				
197		注記無し				
P①	イ	10YR2/3	黒褐色	砂・礫粒５％・ローム粒10％	ハード	
P②		10YR3/4		砂		
P③		注記無し				
P④		注記無し				
P⑤	イ	10YR3/3 ＋10YR2/3 30％ ＋10YR6/3 少量	暗褐色＋黒褐色＋鈍い黄橙色	やや細粒砂	密・ややハード	
	ロ	10YR4/3 ＋10YR3/4 少量	鈍い黄褐色＋暗褐色	細粒砂	密・ややハード	
P⑥	イ	注記無し				
	ロ	10YR3/3 ＋10YR5/6 ５％	暗褐色＋黄褐色	砂・礫粒（２～３㎜）多量	やや粗・ハード	
	ハ	10YR2/2 ＋10YR7/6 ３％	黒褐色＋明黄褐色	砂・10YR8/4浅黄褐色ローム粒微量	やや密・ややハード	
土壙１	イ	10YR2/3 ＋10YR4/4 少量	黒褐色＋褐色	細粒砂	密・ソフト	炭粒微量
	ロ	10YR2/2 ＋10YR2/1 30％	黒褐色＋黒色	細粒砂・10YR8/4浅黄橙色火山灰10％	密・ややソフト	
	ハ	10YR2/3 ＋7.5YR5/8 微量	黒褐色＋明褐色	細粒砂・10YR8/4浅黄橙色火山灰粒20％	やや密・ソフト	炭粒少量
	ニ	10YR2/3	黒褐色	細粒砂	密・ソフト	
土壙８	イ	10YR3/2 ＋10YR3/4 40％ ＋10YR2/1 30％	黒褐色＋暗褐色＋黒色	やや細粒砂・礫粒少量	やや密・ややハード	
	ロ	10YR2/3 ＋7.5YR8/8 １％ ＋7.5YR3/3 少量	黒褐色＋黄橙色＋暗褐色	細粒砂	やや密・ソフト	
	ハ	10YR2/3 ＋10YR5/4 50％ ＋10YR2/1 少量	黒褐色＋鈍い黄褐色＋黒色	細粒砂	やや密・ややハード	
	ニ	10YR4/4 ＋10YR2/2	褐色＋黒褐色	砂・礫粒（２～３㎜）少量	やや粗・ややハード	
	ホ	10YR3/1 ＋10YR8/1 多量	黒褐色＋灰白色	砂・礫粒少量	密・ハード	炭ブロック１％
	ヘ	10YR4/4 ＋10YR3/4 40％	褐色＋暗褐色	砂・細粒砂・礫粒（２～３㎜）少量	やや密・ややソフト	
	ト	10YR4/3	鈍い黄褐色	砂・灰黄白色砂80％	密・ハード	
	チ	10YR2/3	黒褐色	やや細粒砂・礫粒少量・灰黄白色砂70％	やや密・ややソフト	
土壙23	い	10YR3/3 ＋10YR8/2 少量	暗褐色＋灰白色	砂・円礫粒（１～２㎜）やや混	やや密・ややソフト	
	ろ	10YR2/3	黒褐色	砂・礫（１㎜）やや混・小礫粒50％・黄白色粘土塊やや混	やや粗・ハード	
	は	10YR3/4	暗褐色	砂・赤褐色粘土塊（粘性有）10％・小礫粒（１～２㎜）少量	やや粗・ソフト	
	に	10YR4/3	鈍い黄褐色	砂・小円礫粒５％・赤褐色粘質土少量	やや粗・ソフト	黒褐色硬質塊
	ほ	10YR3/2 ＋10YR1.7/1 50％	黒褐色＋黒色	砂・黄褐色ローム粒３％	密・ソフト	
	へ	10YR3/3	暗褐色	砂・10YR7/3灰白色粘土80％・赤褐色粒少量	粘性ややあり・やや密・ハード	
	と	10YR3/4 ＋10YR8/6 50％	暗褐・黄橙色	砂・円礫粒（１～２㎜）５％・10YR5/4鈍い黄褐色ローム10％・10YR8/1灰白色火山灰粒10％	やや粗・ややハード	
	ち	10YR4/3	鈍い黄褐色	砂・礫粒多量・白色砂粒全体に散らばる	やや粗・ややハード	炭粒・銚土粒少量
	り	10YR6/6 ＋7.5YR8/8 ５％	明黄褐色＋黄橙色	砂・円礫粒少量	密・ややハード	
	ぬ	10YR4/4 ＋7.5YR8/8 50％	褐色＋黄橙色	砂・円礫粒多量	やや粗・ややハード	
	る	10YR3/4 ＋10YR2/1 微量	暗褐色＋黒色	砂・灰白色粘土粒少量	やや密・ソフト	炭ブロック
	を	10YR3/2 ＋7.5YR2/3 20％	黒褐色＋極暗褐色	砂・10YR8/6黄橙色硬質粘土塊50％・円礫微量・黄白色砂粒20％	密・ややソフト	
	わ	10YR3/3 ＋10YR1.7/1 ５％	暗褐色＋黒色	砂・黄色砂粒微量	密・ソフト	木質
	か	10YR4/3	鈍い黄褐色	砂・10YR8/6黄橙色硬質粘土塊10％・小礫粒やや混	やや密・ソフト	
	よ	10YR3/3	暗褐色	砂10％・7.5YR8/6浅黄橙色粘土・円礫粒少量	やや密・ハード	
	た	10YR3/3 ＋10YR3/4	暗褐色	砂	密・ソフト	炭粒微量
	れ	10YR3/4	暗褐色	砂・小礫粒少量	粘性ややあり・やや密・ソフト	
	そ	10YR4/3	鈍い黄褐色	砂・礫粒微量混	粘性ややあり・密・ハード	

表２．第10、11、12グリッド東西セクション北壁土層〈SPB-SPB'〉

Ⅰ	1	10YR4/4	褐色	砂質土・礫粒１％・火山灰30％	粘性無し・しまり有り	炭１％
	2	10YR3/3	暗褐色	砂質土・礫粒少量・火山灰20％	粘性無し・しまり有り	炭１％
	3	10YR3/4	暗褐色	砂質土・礫粒１％・火山灰３％	粘性無し・しまり有り	炭２％
	4	10YR4/4	褐色	砂質土・礫粒５％	粘性無し・しまり有り	焼土粒微量・炭少量
	5	10YR5/3	鈍い黄褐色	砂質土・礫・礫粒20％	粘性無し・しまり有り・やや粗	焼土粒微量・炭少量
	6	10YR5/4	鈍い黄褐色	砂質土・礫10％・火山灰１％	粘性無し・しまり有り	炭微量
	7	10YR4/3	鈍い黄褐色	砂質土・礫粒微量	粘性無し・しまり有り	
	8	10YR8/4	浅黄橙色	礫粒３％	粘性無し・しまり有り・ハード	
	9	10YR4/6	褐色	砂質土・礫粒５％・火山灰10％	粘性無し・しまり有り	焼土粒少量・炭１％
	10	10YR4/4	褐色	砂質土・礫粒３％	粘性無し・しまり有り	
	11	10YR7/6	明黄褐色	ローム・砂利微量		
	12	10YR5/4	鈍い黄褐色	砂質土・粗砂30％・微砂25％・ロームブロック30％・礫若干		
	13	10YR4/4	褐色	砂質土・粗砂90％・礫10％		
Ⅱ―２	1	10YR4/3	鈍い黄褐	砂質土・砂30％・礫粒１％・火山灰３％	粘性無し・しまり有り	
	2	10YR3/4	暗褐色	砂質土・砂20％・礫粒微量・火山灰10％	粘性無し・しまり有り	炭少量
	3	10YR5/6	黄褐色	砂・火山灰５％	粘性無し・ややしまり有り	炭少量
	4	10YR5/4	鈍い黄褐色	砂質土・礫粒微量・火山灰２％	粘性無し・しまり有り	焼土粒微量・炭少量
	5	10YR5/4	鈍い黄褐色	砂質土・礫粒少量・火山灰10％	粘性無し・ややしまり有り	炭微量
	6	10YR4/4	褐色	砂質土・礫粒１％・火山灰10％	粘性無し・しまり有り	
Ⅳ		10YR5/4	鈍い黄褐	砂質土・礫粒微量	粘性無し・ややしまり有り	
Ⅴ		10YR6/6	明黄褐色	砂	粘性無し・しまりあまりなし	
小柱穴	a	10YR2/3	黒褐色	砂質土	粘性無し・しまりあまりなし	炭微量
	b	10YR6/4	鈍い黄橙色	砂・火山灰20％	粘性無し・しまりあまりなし	
	c	10YR6/3	鈍い黄橙色	砂・礫粒２％・火山灰３％	粘性無し・ややしまり有り・やや粗	炭少量
	d	10YR5/6	鈍い黄橙色	砂質土・礫粒１％	粘性無し・ややしまり有り・やや粗	焼土粒微量・炭１％
	e	10YR6/4	鈍い黄橙色	砂	粘性無し・しまりあまりなし	
	f	注記無し				
	g	10YR3/4	暗褐色	10YR5/6黄褐色40％・礫粒１％・ローム粒・ロームブロック40％	粘性無し・しまりあまりなし	焼土粒５％・炭１％
基礎溝１	イ	10YR4/4	褐色	砂質土・礫粒１％・火山灰30％	粘性無し・しまり有り	炭１％
	ロ	注記無し				
溝３	イ	注記無し				
溝か？	イ	10YR2/3	黒褐色	礫粒	ハード	焼土粒
	ロ	10YR4/3	鈍い黄褐色	砂質土・砂粒60％・礫粒５％・ローム粒35％	粘性わずかあり	焼土粒微量
	ハ	10YR4/4	褐色	砂質土・砂粒40％・礫45％	粘性無し	
Ｐ38	イ	10YR5/6	黄褐色	砂・礫・礫粒５％	粘性無し・しまりなし	炭少量
Ｐ41	イ	10YR5/4	鈍い黄褐色	砂質土・砂20％・礫30％・火山灰５％	粘性無し・ややしまり有り	焼土粒微量・炭１％
	ロ	10YR5/4	鈍い黄褐色	砂・礫・礫粒20％	粘性無し・しまりなし	炭少量
Ｐ①	イ	10YR5/6	黄褐	砂質土・礫・礫粒５％・火山灰３％	粘性無し・しまり有り	炭１％・木片
Ｐ②	イ	10YR4/6	褐色	砂質土・礫・礫粒20％・火山灰１％	粘性無し・ややしまり有り	炭１％
土壙か？	イ	10YR4/6	褐色	砂質土・礫粒少量	粘性無し・しまり有り	
	ロ	10YR3/4	暗褐色	砂質土・礫粒少量	粘性無し・しまり有り	炭微量
	ハ	10YR2/3	黒褐色	砂質土・礫粒少量	粘性無し・しまり有り	炭３％
	ニ	10YR3/4	暗褐色	砂質土・礫粒微量	粘性無し・しまり有り	炭１％
炉跡②	い	10YR4/6	鈍い黄褐	砂質土・礫粒少量・火山灰５％	粘性無し・ややしまり有り	
	ろ	10YR3/4	暗褐色	砂質土・礫粒３％・火山灰５％	粘性無し・ややしまり有り	炭２％
	は	10YR3/4	暗褐色	砂質土・礫粒少量・火山灰１％	粘性無し・ややしまり有り	炭３％・腐食木片
	に	10YR4/3	鈍い黄褐	砂質土・礫粒１％・火山灰３％	粘性無し・ややしまり有り	炭少量
	ほ	10YR4/4	褐色	砂質土・礫粒３％・火山灰10％	粘性無し・しまりあまりなし	炭１％・木片
	へ	10YR3/4	暗褐色	砂質土・礫粒１％・火山灰３％	粘性無し・ややしまり有り	炭２％
	と	10YR4/4	褐色	砂質土・ロームブロック20％	ややしまり有り	腐食木片
	ち	10YR4/3	鈍い黄褐	砂質土・ロームブロック10％	粘性無し・しまりなし	

Ⅲ　調査の概要

１.検出遺構

本調査で検出された遺構は19世紀以降の溝、土壙、17世紀後半以降の掘立柱建物２基、竪穴状土壙２基、擦文時代後期のものと思われる人骨を伴う土壙墓１基、用途不明土壙１基、焼土を伴う大型土壙１基、縄文時代後期のものと思われる土壙１基である。遺物は陶磁器が2254点（内16～17世紀初頭のものが49点）擦文土器が427点、縄文土器が129点出土している。

２.基本層序（第2図・表1・表2-1）

発掘区における基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層　　表土層
Ⅱ-1層　10YR1.7/1～10YR3/3 黒色砂質土層
Ⅱ-2層　10YR3/2 白色火山灰混黒色砂質土層
Ⅲ層　　10YR1.7/1～10YR2/2 茶褐色砂質土層
Ⅳ層　　10YR3/4～10YR2/2 黄褐色砂質土層
Ⅴ層　　10YR4/3 黄色砂層（地山層）

Ⅰ層は近世以降の建物建築等による攪乱層である。遺構以外で図中に番号を記していない層はⅠ-5層以下のⅠ層である。新しい時期のものであるので、大きくひとかたまりでⅠ-6層とする。

溝2、柱穴、ピットなどの立ち上がりから19世紀以降～現代までの間に２回の整地が行われた様であることがうかがえる。発掘区のほぼ全面に亘って認められ、部分的に深く掘りこんである土壙状の攪乱もあり、中世から現代までの遺物が検出される。

Ⅱ-1層は近世の自然堆積層。Ⅱ-2層はOs-aと思われる火山灰を多量に含む層である。Ⅲ層は擦文土器包含層。Ⅳ層は縄文土器包含層である。各層の堆積は非常に薄く、調査区内の大部分が近世の整地による削平等の攪乱を受けており、Ⅲ・Ⅳ層の堆積もセクション上で第6・9グリッドの一部にしか確認されず、一部表土層の下が第Ⅴ層（地山層）である箇所も存在した。このため、調査区内では、明瞭な中世の包含層は確認できなかった。

削平を受ける前の地形としては、第9グリッドまではやや水平、それ以南から山に向かってのぼる緩やかな傾斜を持つ地形が推察できる。

IV　遺構確認調査

1.近世の遺構と遺物

掘立柱建物跡（第3図）

調査区内で2棟検出されている。一棟目は調査区の中央、1・2・4・5・7・8グリッドに位置し、P91.93.94.96.105.106.120.123.127.149.154.171..175.177を使用する総柱の建物と想定した。長軸方向は南北。柱間は梁行（西から）6.3尺・4.8尺、桁行6.6尺・5.9尺・5.9尺・7.2尺とやや不揃いである。P154から肥前系陶片、P171の底から内の山窯の皿（PL.3-*53*）が出土している。17世紀後半以降の建物であると思われる。

2棟目は調査区外まで建物の範囲が延びるようであり、長軸方向は不明であるが、南北方向に3間の建物を想定した。P25.28.46.54.58を使用する。又、近世以降の攪乱によって破壊されたピットがP25とP46の間に存在したと思われる。P25の柱痕跡上面から肥前系皿と碗が出土している。

竪穴状土壙

（土壙7・23 第4・5図 PL.1-*3～7* ・3-*41*・*45*・*49*・*51*・*57*）

第2・3グリッドに位置し、方形を呈すると思われる土壙。土壙7には底面に小ピットを伴う溝が四角く囲うように掘られているのが確認された。遺物の出土はない。遺構が調査区外に延びていること。上面からの攪乱が多く、壁等が破壊されているため、全体の正確な形状は不明。土壙23はその切り合い関係から、土壙7より古いと推される土壙。この土壙の底面からは小柱穴を伴わない溝が2本検出された。東側の溝には木質部が非常に良好な状態で残存した。根太の一部かとも推される。この溝は何らかの理由で西側の溝から作り替えられたものであろう。覆土上面からは16世紀の遺物が多数出土した（PL.*41*・*45*・*49*・*51*）。殆どが近世の攪乱層内からの出土であるが、㉘層上面（第2図、SPA-SPA'・第5図）から、17世紀前半頃のものと思われる、刷毛目唐津の破片が出土した（PL.*57*）。このことからこの土壙23は少なくとも17世紀以降の遺構であることが推される。

P184は土壙7の底面を検出した時点で、P187は土壙10を掘り上げた時点で確認されたものである。遺構内で2つしか検出されなかったこと、位置的に遺構内でどのように利用されたかという点に若干の疑問点が残るが、土壙7もしくは23に伴うものではないかと思われる。

土壙12

第2グリッドに位置し、土壙8を切る遺構。土壙8を掘り進む関係で、東半分を破壊してしまったため全体の形状は不明だが、円形に近い楕円形を呈すると推される。残存している部分での直径75㎝、深さ約15㎝、覆土から16世紀後半～17世紀の唐津皿が出土しているP.135に切られており、土壙覆土上面からも志野皿の破片が出土しているため、この土壙は16世紀後半以降の遺構であると推察される。

国道228号線

至松前

至江差

排水溝

1

2

3

4

5

7
11

8
9

10
13

14

12
15

搬乱7
搬乱13
搬乱
搬乱18
搬乱15
搬乱22
搬乱21
搬乱8
搬乱25
搬乱29
搬乱28

土坑23
土坑7
土坑6
土坑2
土坑10
土坑8
土坑12
土坑11
土坑5
土坑13
土坑16
土坑1
土坑9
土坑19
土坑17
土坑18
土坑20

焼土6
焼土9
焼土5
焼土7
焼土1
焼土2
焼土4

溝1
溝2
溝4
溝3

炉跡③
炉跡②
炉跡①

基礎溝1
基礎溝2

II—2
火山灰
黒色土範囲

II層灰白色範囲

石
焼土
木

0 2m

0 8m

第３図　調査区遺構配置図

2.擦文時代の遺構と遺物

土壙1（PL.1-*10*・*11*）

第8・9グリッドに位置する円形に近い楕円形の遺構。長径約100cm、短径約90cm、深さ約10cm。遺構底面から小柱穴が数個検出されているが、検出位置が不揃いであるため、当遺構に伴うものか不明である。遺物は、覆土中から擦文土器破片が14点出土している。内一点は第11図と同一個体と思われる口縁部分である。覆土ハ層から赤色を呈するものが検出された。

土壙8（第4・5図・PL.1-6）

第2・3・5・6グリッドに位置し、土壙7・23に切られる遺構。セクションでは、立ち上がりが近世の遺構と思われるものに破壊されており、調査区外に遺構が広がっているため、全体の形状は不明。残存している部分で直径約400cm、深さ約45cm。第Ⅴ層（地山層）まで掘り下げた時点で3回の使用が認められる焼土を検出した。焼土中から遺物の出土はない。遺構の南端に当たると思われる部分から、直径約15cm、深さ約30cmのピットが一つ検出された。これは地山層に入ってから輪郭が確認されたものであり、当遺構に伴うものである可能性が高い。焼土も検出されていることから、住居跡のようなものであろうかとも推察できる。

遺構覆土上面から擦文土器と近世陶磁器が数多く出土し（第2図土壙8イ～ト層・第5層）、それ以下のチ層は無遺物層であった。土壙8が埋没した後、土圧で落ち込んだくぼみを人為的に埋めた際に、擦文から近世までの遺物が混入したのではないかと思われる。

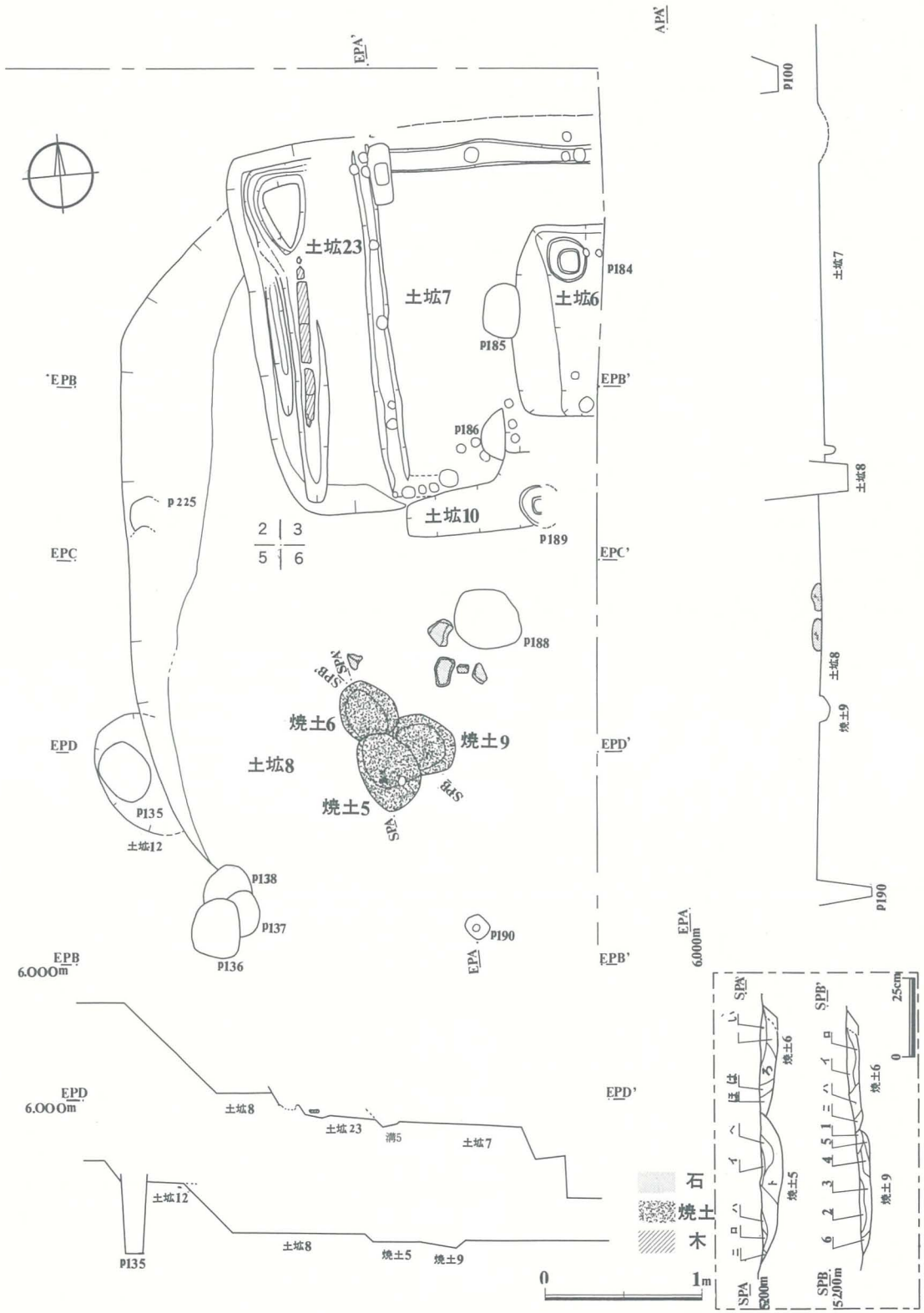
表3．第6グリッド焼土5、6、9南北セクション西壁土層〈SPA-SPA'・SPB-SPB'〉

SPA-SPA'

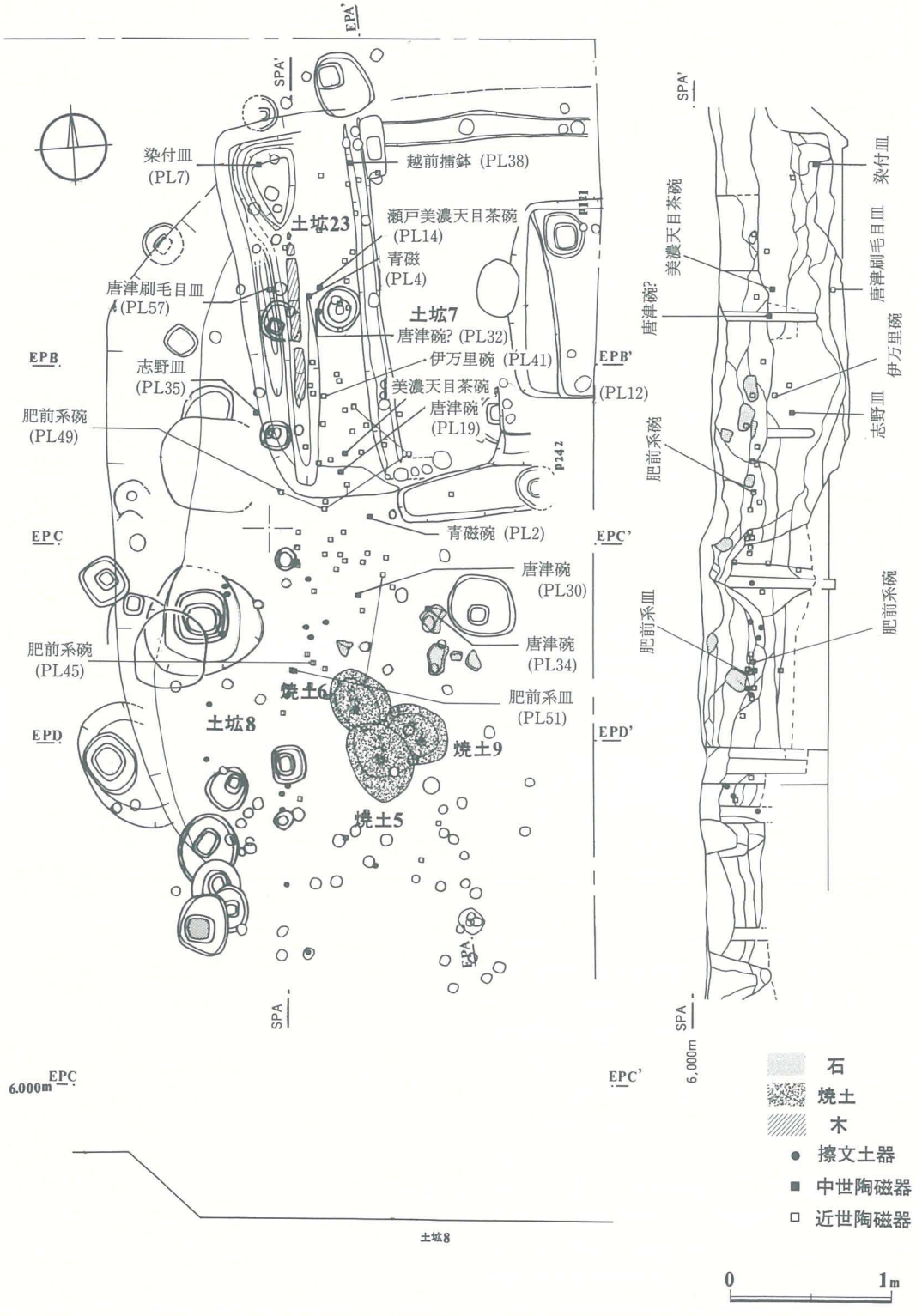
焼土5	イ	10YR 1.7/1	黒色	黒色砂・炭混じり黒色砂	密	
	ロ	10YR 1.7/1	黒色	黒色砂・炭混じり黒色砂	密	
	ハ	7.5YR 3/4 +10YR 1.7/1 微量	暗褐色＋黒色	砂	密	
	ニ	7.5YR 4/6 +10YR 1.7/1 10%	褐色＋黒色	砂	密	
	ホ	7.5YR 3/4 +10YR 1.7/1 1%	暗褐色＋黒色	砂	密	
	ヘ	10YR 4/4 +7.5YR 4/6 10%	褐色	砂・黒色砂微量	密	
	ト	7.5YR 4/6 +10YR 1.7/1 微量	褐色＋黒色	砂	密	
焼土6	い	10YR 2/1 70% +10YR 4/6 30%	黒色＋暗褐色	砂	やや密	
	ろ	7.5YR 4/6 90% +10YR 1.7/1 少量	褐色＋黒色	砂・炭混じり黒色砂	やや密	
	は	7.5YR 4/6 70% +10YR 3/4 30%	褐色＋暗褐色	砂・Hue10YR1.7/1炭混じり黒色砂微量	密	
	に	7.5YR 4/6 50% +10YR 3/4 50%	褐色＋暗褐色	砂・Hue10YR1.7/1炭混じり黒色砂少量	密	
	ほ	7.5YR 3/3 +10YR 1.7/1 少量	暗褐色＋黒色	砂		

SPB-SPB'

焼土6	イ	10YR 3/4 +10YR 2/2 +7.5YR3/4	暗褐色＋黒褐色	砂		焼土わずか
	ロ	10YR 3/4 +10YR 2/2 微量	暗褐色＋黒褐色	砂		
	ハ	10YR 3/4 +7.5YR 3/4 極少量	暗褐色	砂		
	ニ	10YR 3/4 +10YR 2/2 わずか	暗褐色＋黒褐色	砂		
	ホ	10YR 3/3 +7.5YR 3/4 極少量	暗褐色	砂		
焼土9	1	10YR 3/4 60% +10YR 2/3 40%	暗褐色＋黒褐色	砂		
	2	10YR 3/4 80% +10YR 2/3 10% +7.5YR 3/4 10%	暗褐色＋黒褐色	砂		
	3	10YR 3/4 +10YR 2/2 極少量	暗褐色＋黒褐色	砂		
	4	8YR 3/4	暗褐色	砂		
	5	10YR 3/4 +10YR 2/3 微量	暗褐色＋黒褐色	砂		
	6	10YR 3/4 +10YR 2/3 微量	暗褐色＋黒褐色	砂		



第4図　土壙7・8・23平面図他①



第5図　土壙7・8・23平面図他②

土壙13

（擦文期土壙墓・第7図・PL.2-*1*～*13*）

第4･7グリッドに位置する土壙墓。長径約180㎝、短径約70㎝、深さ約30㎝の長円形を呈する遺構。P27･28･31に一部破壊されている部分がある（第7図・PL.2-*1*・*2*）が、図中では人骨と墓壙を優先して表現している。P24は確認面が墓壙検出面と同じであり、底面のレベルが墓壙底面とほぼ同じである事から、墓壙と同時期に掘られたものである可能性があり図示した。墓標のようなものを立てるためのものではないか思われる。

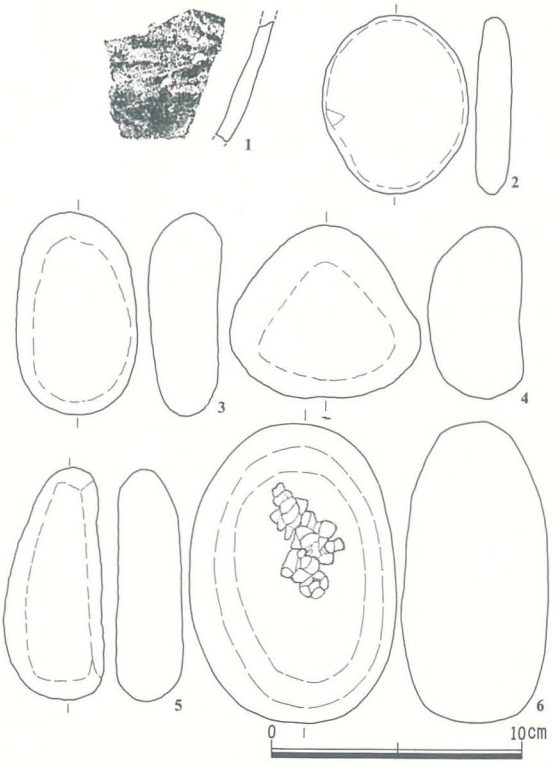
墓壙覆土内からは土器片が2点、石器が5点出土した（第7図・PL.*7*～*13*）。石器、第7図-２、３、６は、半裁中に出土したものであり、位置、高さは不明。第7図-４、５は覆土上面、１層と２層のあたりから出土している。土器は2片とも擦文土器であるが、第7図-１のものは、覆土１層と２層の境目から出土したものである（第6図・PL.*3*・*8*）。覆土１層は被葬者の遺体が腐敗する過程で土圧で下がった墓壙の上面に堆積した土である可能性があり、この土器片もその際に紛れ込んだものであるかもしれない。覆土１層からは遺物の出土はない。もう１片は、被葬者の左膝のあたりから出土している（PL.*5*・*7*）。どちらも擦文土器片で、７図-１は胴部破片、もう１片は、器種は不明であるが、直立する口縁部の破片である。

頭部付近に樹皮状のものを丸めたようなものが置かれていた。副葬品の一部ではないかと考えられる。また、サンプルとして採取した土を洗浄したところ、直径１㎜程度の白色のビーズが１点出土した。

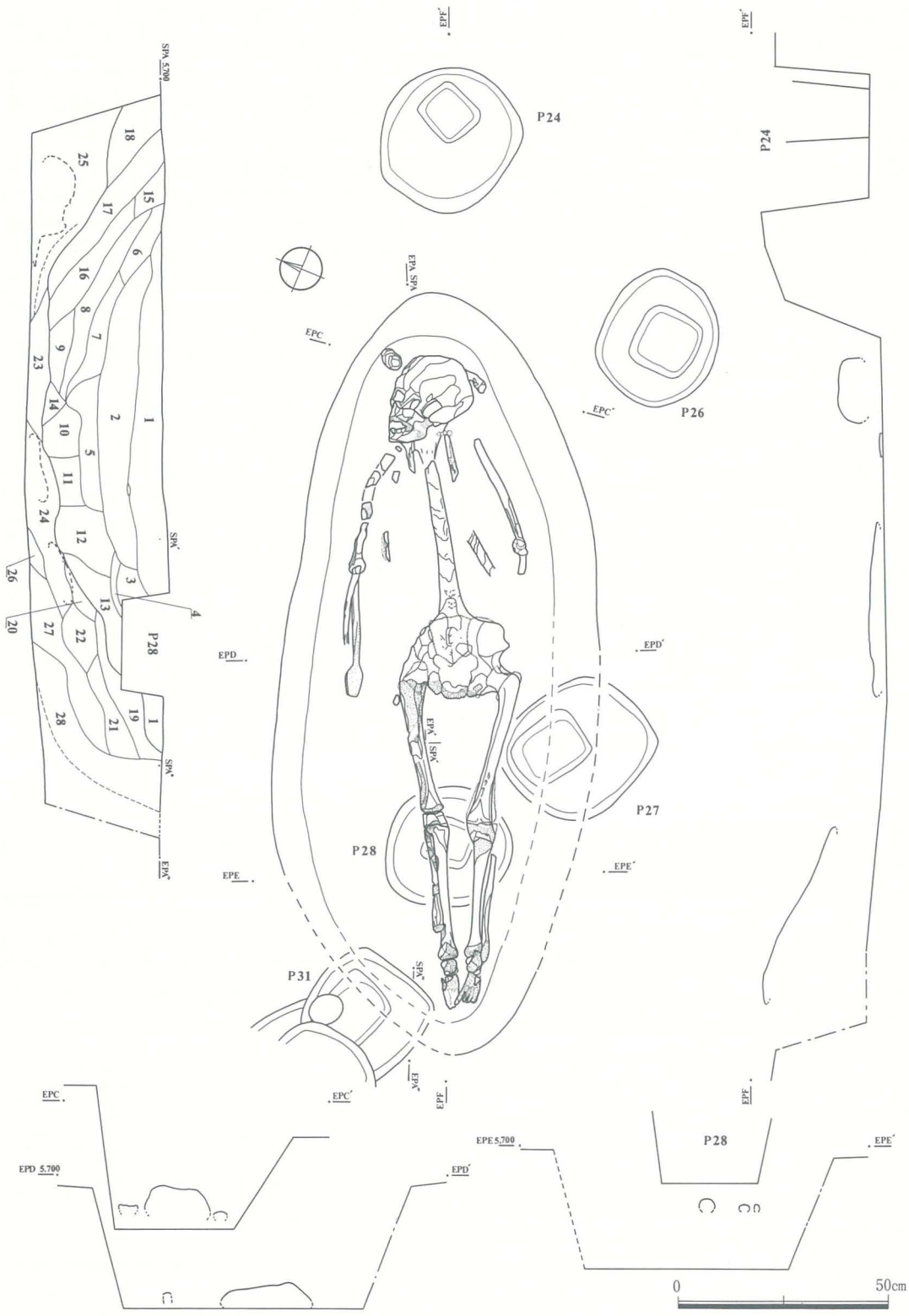
土葬墓はII層を除去したのち、IV層面を精査する課程で確認された。この箇所はIII層の堆積が極薄く、IV層が露出している箇所が大部分であった。そのため確認面はIV層であるが、土層の上面の堆積状況から削られた様子が見て取れる。整地のための土地の削平が行われた際にIII層が削られ、土壙墓の上面も同時に削られ、この様な状態になったのではないかと考えられる。このことから、掘込み面がIII層であった可能性は高い。また、土葬墓の覆土内には浅黄橙色の火山灰を微量であるが含む層がある（表４）。その色調から白頭山苫小牧火山灰ではないかと思われ、被葬者を埋葬する際に混じったものと考えられる。

土壙墓内には身長約150㎝の被葬者が爪先を頭部より高くした状態で、俯せで埋葬されていた（PL.*2*・*6*）。一度底まで掘込んだ後下半身の部分にのみ土を戻し入れている。被葬者を高い位置から滑り込ませるために傾斜をつけたのか、掘った墓穴が小さくて、遺体が入りきらなくてやむを得ず坂を作り、この様な不自然な形で埋葬したのか等が考えられる。しかし、遺体を伸展葬で埋葬する際にはそれにあわせた（もしくはひとまわり大きいくらいの）墓壙を掘るものであるからもし仮に間違えたとしても掘り直すことが想像できる。わざわざ土を入れてまで足を高くするにはそれなりの理由があるように思われる。

埋葬形態に特異なものが見られるが、伸展葬であること、覆土内の火山灰のこと、擦文土器が遺体のすぐそばで出土していることから、この土壙墓は擦文期後半の遺構であろうと推察する。頭位北東。



第６図　土壙13　出土遺物



第 7 図　土壙13　擦文期土壙墓平面図他

表４．第４グリッド土壙13東西セクション南壁土層〈SPA-SPA'-SPA''〉

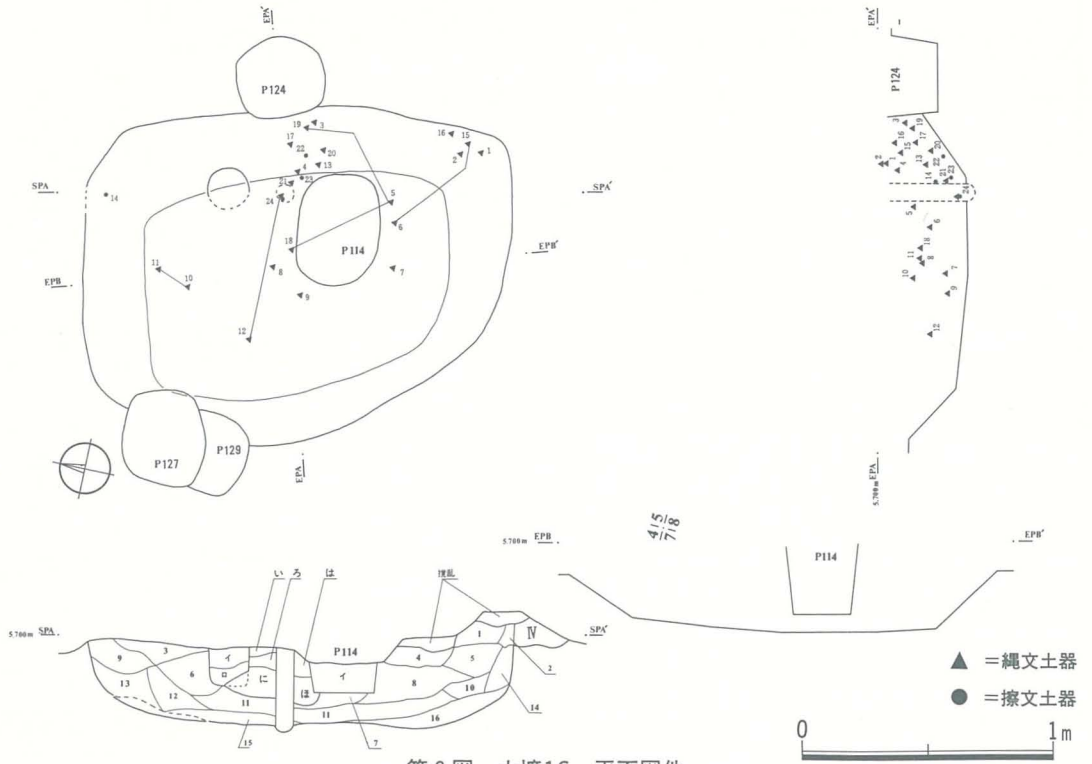
1	10YR3/4 +10YR1.7/1	暗褐色	砂質土・礫粒やや混	やや細粒・密・ソフト	
2	10YR2/2	黒褐色	砂質土・黄色火山灰微量混	細粒・密・ソフト	擦文土器片・炭粒
3	10YR2/3 +10YR3/4 40% +10YR7/6 少量	黒褐色＋暗褐色＋明黄褐色	砂質土	細粒・密・ソフト	
4	10YR3/4 +10YR2/2 微量	暗褐色＋黒褐色	砂質土	やや細粒・密・ソフト	
5	10YR2/3 +10YR3/4 30% +10YR2/2 少量	黒褐色＋暗褐色	砂質土	細粒・やや密・ソフト	炭ブロック
6	10YR2/2 +10YR1.7/1 少量	黒褐色＋黒色	砂質土・10YR8/4浅黄橙火山灰１％	やや細粒・密・ソフト	
7	10YR4/6 +10YR3/4 40% +10YR2/3 10%	褐色＋暗褐色＋黒褐色	砂質土	やや細粒	
8	10YR2/3 +10YR2/2 少量	黒褐色	砂質土	やや細粒・密・ソフト	2.5YR4/8赤 褐色粒極微量
9	10YR2/3 +10YR7/6 極微量	黒褐色＋明黄褐色	砂質土	やや細粒・密・ソフト	
10	10YR2/2 +10YR2/3 40% +10YR4/6 少量	黒褐色＋褐色	砂質土	細粒・密・ソフト	
11	10YR4/4 +10YR2/3 30% +10YR1.7/1 少量	褐色＋黒褐色＋黒色	砂質土	やや細粒・密・ソフト	
12	10YR2/3 +10YR7/6 50% +10YR1.7/1 少量	黒褐色＋明黄褐色＋黒色	砂質土	やや細粒・密・ソフト	
13	10YR2/3 +10YR4/6 30% +10YR2/2 10%	黒褐色＋褐色	砂質土・10YR8/4浅黄橙火山灰少量	やや細粒・密・ソフト	
14	10YR2/2 +10YR7/6 極微量	黒褐色＋明黄褐色	砂質土	やや細粒・密・ソフト （９よりややハード）	
15	10YR2/3 +10YR1.7/1 微量	黒褐色＋黒色	砂質土	やや細粒・密・ソフト	
16	10YR4/4 +10YR2/3 50% +10YR1.7/1 微量	褐色＋黒褐色＋黒色	砂質土	やや細粒・密・ソフト	
17	10YR3/4 +10YR2/3 5％ +10YR1.7/1 微量	暗褐色＋黒褐色＋黒色	砂質土・10YR8/4浅黄橙火山灰極微量	やや細粒・密・ソフト	
18	10YR2/3 +10YR4/6 微量	黒褐色＋褐色	砂質土・10YR8/4浅黄橙火山灰少量	細粒・やや密・ソフト	
19	10YR4/6 +10YR1.7/1 ブロック状に何カ所かに混入	褐色＋黒色	砂質土	やや細粒・密・ソフト	
20	10YR4/4 +10YR2/3 50% +10YR1.7/1 微量	褐色＋黒褐色＋黒色	砂質土	やや細粒・やや密・ソフト	
21	10YR3/4 +10YR2/3 50% +10YR1.7/1 10%	暗褐色＋黒褐色＋黒色	砂質土	やや細粒・密・ソフト	
22	10YR1.7/1 +10YR2/3 40% +10YR1.7/1 10%	黒色＋黒褐色＋黒色	砂質土・10YR5/4鈍い黄褐色火山灰微量	細粒・密・ややソフト	
23	10YR3/3 +10YR6/8 5％	暗褐色＋明黄褐色	砂質土	やや細粒・やや密・ソフト	
24	10YR3/4 +10YR1.7/1 少量	暗褐色＋黒色	砂質土	やや細粒・密・ややハード	骨
25	10YR3/4 +10YR2/2	暗褐色＋黒褐色	砂質土	やや細粒・密・ソフト	炭粒少量
26	10YR4/4	褐色	砂質土	やや細粒・密・ややハード	
27	10YR3/4～4/4 +10YR1.7/1 全体にブロック状に少量混入	暗褐色～褐色＋黒色	砂質土	やや細粒・密・ソフト	
28	10YR3/4 +10YR1.7/1 少量 +10YR4/4 微量	暗褐色＋黒色＋褐色	砂質土	やや細粒・密・ソフト	

３．縄文時代の遺構と遺物

土壙16（第8図 PL.1-*12～14*・4-*38～50*・*53*）

第5グリッドに位置し、長径約340cm、短径約260cm、深さ約80cmと南北にやや長い隅丸方形を呈する遺構。覆土の上に擦文層である第III層の堆積が認められる（PL*14*）。遺物は後期の土器片が24点出土している（PL.*38～50*・*53*）。破片は後期の特徴を持つものであり、一片を除いてすべて同一個体である。第8図P-24の擦文土器は上面からのほりこみの小ピットによる混入であることが明らかであるが、その他の擦文土器片に関しては、平面で確認できなかった土壙より新しい遺構が存在し、その関係で紛れ込んだのであろうと考えられる。

縄文土器よりも低い位置から擦文土器が出土しているという点でやや疑問の余地が残るが、縄文後期の土壙であるとして問題はないと思われる。



第８図　土壙16　平面図他

表５．第４、５グリッド土壙16南北セクション東壁土層〈SPA-SPA'〉

撹乱	イ	10YR3/2	黒褐色	細粒砂・小礫粒		7.5YR7/8赤色粒(焼土か？)混入
	ロ	10YR4/4　+10YR2/2	褐色＋黒褐色	やや細粒砂	やや粗・ソフト	炭ブロック少量・木質全体に混入
IV層	1	10YR3/4	暗褐色	やや細粒砂・小円礫全体に混	やや粗・ソフト	木質ややあり
小柱穴	a	10YR3/3	暗褐色	礫粒少量		木柱
Pit114	イ	10YR2/2　+10YR4/4　5％	黒褐色＋褐色	細粒砂質土・小礫粒微量	密・ソフト	
	ロ	10YR3/2　+10YR3/4　10％	黒褐色＋暗褐色	細粒砂質土・小円礫全体に散らばる	密・ソフト	
土壙か？	い	10YR3/4　+10YR2/2　少量	暗褐色＋黒褐色	やや細粒砂質土		
	ろ	10YR2/2 60％ +10YR3/3 40％ +10YR1.7/1　少量	黒褐色＋暗褐色＋黒色	細粒砂質土	密・ソフト	
	は	10YR4/3　+10YR3/3 少量	鈍い黄褐色＋暗褐色	やや細粒砂質土	やや密・ソフト	
	に	10YR4/3　+10YR2/3 10％ +10YR2/2	鈍い黄褐色＋黒褐色	砂質土	密・ソフト	
	ほ	10YR4/4　+10YR5/2　少量	褐色＋灰黄褐色	やや細粒砂・10YR8/2灰白色火山灰少量	やや密・ソフト	
土壙16	①	10YR3/4　+10YR2/2 ブロック状に全体に混入	暗褐色	やや細粒砂質土	やや密・ソフト	
	②	10YR4/4	褐色	やや細粒砂質土	粗末・ソフト	
	③	10YR6/4　+10YR3/4 ブロック状に全体に少量混入	鈍い黄橙色	やや細粒砂質土	やや粗・ソフト	
	④	10YR2/3　+10YR2/2　10％	黒褐色	やや細粒砂質土		
	⑤	10YR4/6　+10YR2/2　5％	褐色	やや細粒砂質土	やや密・ソフト	土器片
	⑥	10YR2/3 50％ +10YR3/4　40％ +10YR2/2　少量	黒褐色＋暗褐色	やや細粒砂質土	やや密・ソフト	
	⑦	10YR4/4　+10YR5/1　微量	褐色＋褐灰色	やや細粒砂質土	やや密・ソフト	
	⑧	10YR3/4　+10YR2/3　20％	暗褐色	やや細粒砂質土	やや粗・ソフト	
	⑨	10YR3/3　+10YR2/2　20％	暗褐色	やや細粒砂質土	やや密・ソフト	
	⑩	10YR4/6　+10YR3/2　40％	褐色＋黒褐色	やや細粒砂質土・10YR8/3浅黄橙火山灰微量	やや粗・ソフト	
	⑪	10YR3/4　+10YR2/2　5％	暗褐色	やや細粒砂質土	やや密・ソフト	
	⑫	10YR3/4　+10YR2/2	暗褐色	やや細粒砂質土混じる・Hue10YR8/3浅黄橙火山灰微量	やや密・ややハード	
	⑬	10YR4/4	褐色	やや小礫粒状の砂	やや密・ややハード	
	⑭	10YR6/3 50％ +10YR4/3　40％ +10YR3/2　10％	鈍い黄橙色＋鈍い黄褐色	やや細粒砂質土	やや密・ソフト	
	⑮	10YR2/3　+10YR4/4　30％ +10YR2/2　1％	黒褐色＋褐色	砂	やや密・ややハード	
	⑯	10YR3/4　+10YR2/2　50％	暗褐色	やや細粒砂質土	やや密・ややハード	

Ⅴ　調査区内出土遺物

当遺跡からは肥前系陶磁器を中心に16～17世紀の青磁、染付、擂鉢、後期擦文土器、晩期縄文土器、後期縄文土器などが多数出土しており、上ノ国の市街地での人々の生活が連綿と続いていたことを証明している。(文中の番号は図版中の遺物の番号と一致する)

1.近世陶磁器（第10図 1～7 PL.3-*41*～*60*・*62*～*65*）

1.伊万里染付碗（PL.*41*）　胴部から底部にかけての破片。釉色は黄みの白。全面施釉で、高台畳付きのみ無釉。胎土は白で黒色砂粒がまんべん無く混じっている。高台に砂が附着している。外面に網目文を施文する。17世紀代のものと思われる。

2.伊万里染付碗（PL.*43*）　グレイみの黄色を呈する胎土は緻密で、黒色砂粒を少量含んでいる。釉色は黄味のグレイで、口縁部付近に草花文を施す。全面施釉で、高台畳付きのみ無釉で、砂が付着している。17世紀代のものと思われる。

3.伊万里染付皿（PL.*50*）胎土は緻密で、白色。全体にまんべんなく黒色砂粒が含まれる。釉色は黄みの白で、全面施釉、高台畳付き無釉で、砂粒が付着している。削りだし高台である。口縁内面には草花文を施し、見込みには2本の圏線を引き、草花文を施す。

4.伊万里染付大皿（PL.*48*）胎土は黄みの白、緻密で黒色砂粒がやや混入する。釉色は白色で、全面施釉。高台畳付きのみ無釉である。見込みには山水が施されている。

5.肥前系皿（PL.*53*）ベージュの胎土は緻密で混入物は少ない。外面は口縁部分にのみ施釉、内面施釉されているが、見込み部分蛇の目釉剝ぎである。釉色はうすい緑色である。内の山窯のものであろう。

6.肥前系皿（PL.*54*）グレイ味の黄色の胎土は緻密であり、混入物はほとんどない。釉色はあかるいグレイ味の緑色で、高台付近は無釉、見込み蛇の目釉剝ぎである。5と同様内の山窯のものであろう。

7.肥前系染付蓋（PL.*66*）　白色の胎土は緻密で、黒色砂粒がまんべんなく混入。口縁部内面には口縁に並行に雷文を描き、体部外面には円をモチーフとした文様を描き、見込みには松竹梅を施す。19世紀前半～幕末のものと思われる。

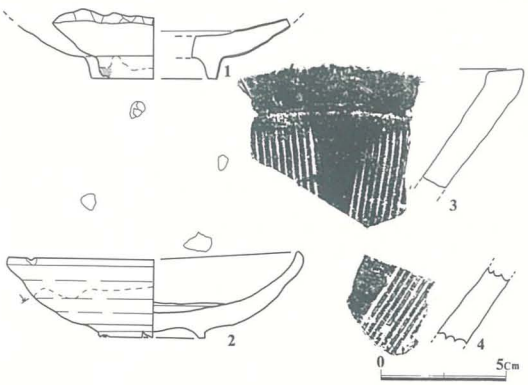
2.中世陶磁器（第9図　PL.3-*1*～*40*・*61*）

1.青磁皿（PL.*6*）、胴部から底部にかけての破片である。釉色はグレイみの黄緑。高台畳付き無釉。見込み蛇の目釉剝ぎ。胎土はグレイ実の黄色を呈し、緻密である。

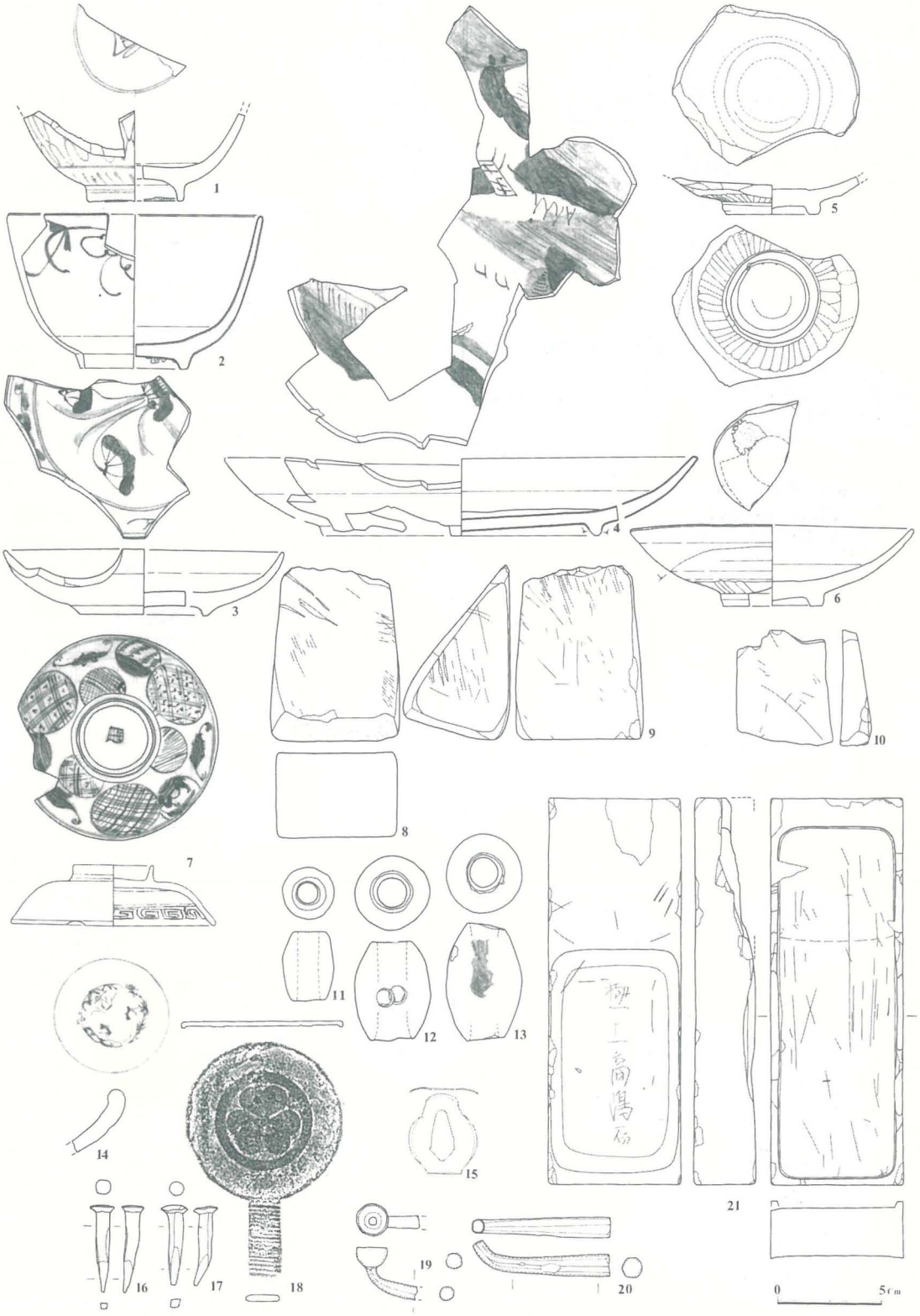
2.唐津胎土目皿（PL.*31*）、口縁を一部欠くが、ほぼ完形。口縁部外面から内面に施釉。釉色は黄味のグレイ。胴部無釉。見込みに4つのトチン跡がある。胎土は強い黄味のオレンジ色を呈し、緻密で白色小礫粒を微量含む。轆轤左回転の削り出し高台。

3.越前擂鉢（PL.*40*）口縁部破片。強い黄味のオレンジ色の胎土は密で小礫粒を多量に含む口縁端部はやや内傾し、しっかりと面を取り、口縁内面で段を形成する。胴部外面には指なでの跡が明瞭に見られる。

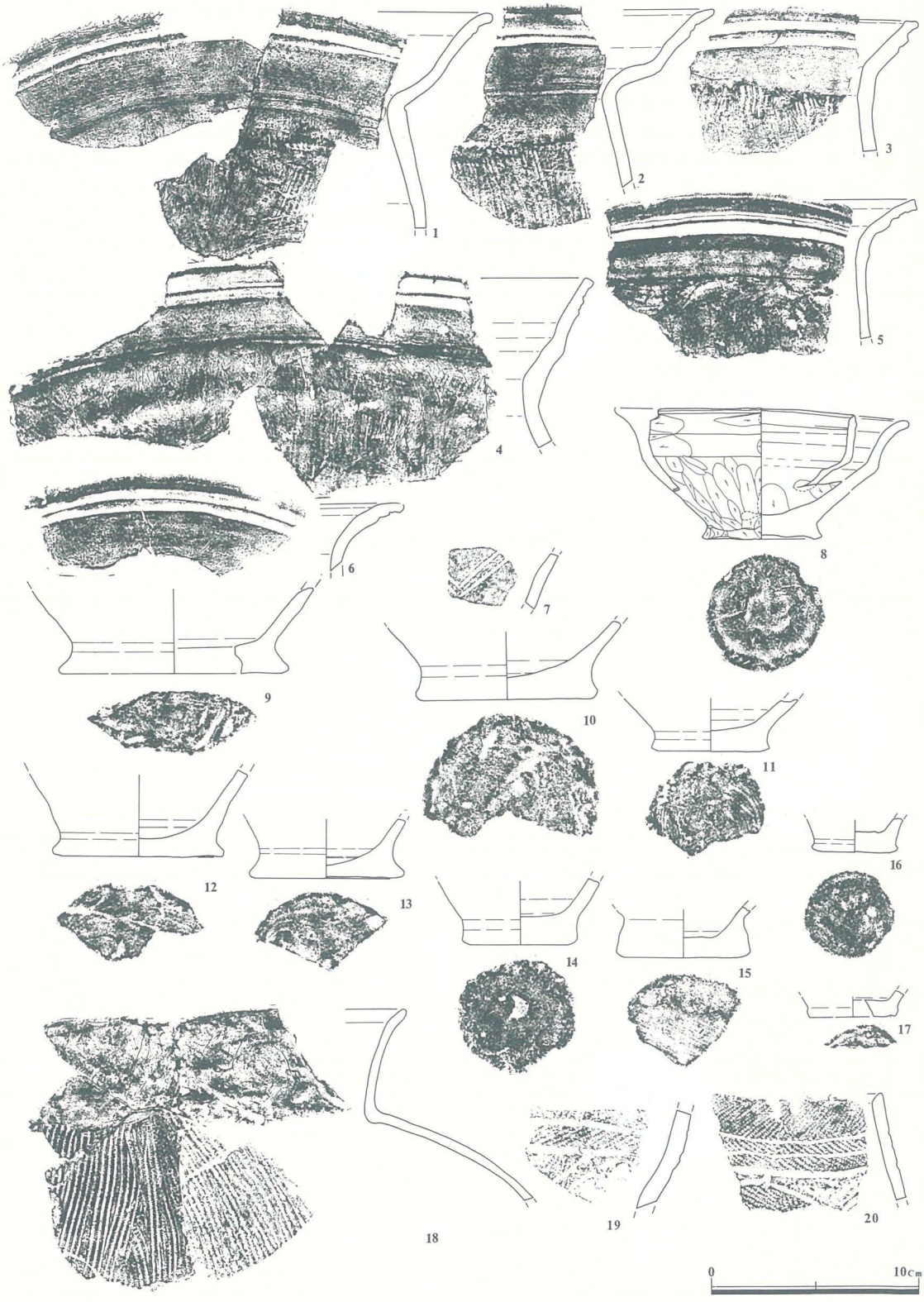
4.越前擂鉢（PL.*38*）胴部破片。薄いベージュの胎土はやや粗く、小礫粒を多量に含む。焼成やや不良。



第9図　調査区出土遺物　（中世陶磁器）



第10図　調査区出土遺物　（近世陶磁器他）



第11図　調査区出土遺物（擦文土器・縄文土器）

VI　まとめ

本遺跡の発掘調査により、縄文時代、擦文時代、中・近世の各期に亘る遺物が出土し、いくつかの遺構が検出された。中世以降の土層の堆積が乏しく、各期を層位的に把えることは充分でなかった。これは特に近世以降繰り返しこの地での居住がなされ、建物（家屋）が建てられた結果、腐植土層の形成が少なかったかと推されるところであり、中世の包含層や遺構面も削平された可能性が残る。一方このことが砂層を基層としている立地条件と相まって前述の人骨の遺存に結びついたとも考えられる。

1.縄文時代の遺物と遺構

0段多条Lを地文とする小片は（PL.4-*31*）円筒下層の古い段階或いはそれ以前であろうか。他地点からの混入かも知れない。ＬＲＬの撚糸文や縦位回転を地文とするものは（*32～34*）、中期末葉頃と推した。沈線と磨消縄文を有する土器（*35～55*）は後期後半、エリモ式以降であろう。土壙10出土の土器は底部が軽い揚げ底に作られる。三ツ谷式に含められるものかと推される。壷形土器と二条の沈線に斜位押捺の縄文を地文とする土器（*56.57*）は晩期中葉と推した。いずれも一、二の小破片が殆どであり、詳細は明らかになし得なかった。

2.擦分時代の遺物と遺構

擦文土器は甕・台付鉢（坏）・鍋？が見られた。甕は７～7.5cm程の巾広の口頸部が強く屈曲して大きく外反する（PL.4-*1～3.5.11.12*）、6.5cm程の口頸部がゆるく外反する（*4*）、４～4.5cmの口頸部が外反する（*6.7.8*）ものなどがある。大きく外反するものは巾広の頸部中間がわずかに膨らみ、軽い段状となる。前二者（*1～5.11.12*）の口縁部には二条の沈線が繞るが後者（*7～8*）ではやや巾広で凹線状を呈している。口頸部は*1～5*では頸部中位の段又は凹線の上部に横位の刷毛目調整（ナデ）がなされ、以下頸部のくびれを経、胴部以下は縦位の粗いヘラ削りが施される。*6*は3.5cm巾の外反する口線に２条の沈線が巡っている。頸部下７cmまで横位に刷毛目調節がされ以下縦位の粗いヘラ削りがされる。沈線部を刷毛で強くおさえ、頸部中位に僅かな膨らみをつくる。胴部上位まで横位の刷毛目がみられる例である。*4*は頸部中程下位に約１cm巾の凹線が巡る。底部の形状は、殆どが張り出しを持つものである。径に大小がある。鍋？とした（*15*）は、底径が23cm程のもので、内面が丁寧にミガキ調整されている。外面は粗いヘラ削りのままである。或いは大型の低平な台付の鉢（坏）かとも推したが、類例も知らず鍋？とした。なお、同様の別個体片がある。内削ぎの直口縁の破片（*9*）があり、外面煤状の付着が著しい。或いは該種の口縁部とも推したが、明らかにできなかった。二条一単位の短い山形の刻線文を持つ頸部破片（*14*）が１点出土した。外面に丁寧な刷毛目調整がされ、内面もミガキが施されている。

これらの擦文土器についてはその出土状況が遺構内での一括その他明瞭な共伴関係や層位的前後関係のいずれかをも明確に示すものではなく、又個体識別や接合作業、更には接合関係等に充分な検討を加えることができなかったうえに周辺遺跡との比較もなし得ていないが、胴部以下の粗いヘラ削りなどが共通しており、一つのまとまりを有するものかと推し、なお更に検討を加えていくこととしたい。道南日本海側の擦文土器群中の末期のある時期に属するものであろうか。なお写真図版中の小型異形の土器（*17～20*）も後考としたい。

墓壙及び人骨を擦文時代としたのは、墓壙の覆土、確認面及び左膝関節に密接して検出された土器小片等による。墓壙の確認は近世の包含層除去後、擦文期の包含層であるIII層の上面であり、覆土中には 層中に堆積する苫小牧層かと推される火山灰層が小ブロック状に混入している。又覆土中から前述の土器片・礫石器以外、中近世遺物も見ることはない。覆土上面を覆う第１層は墓壙埋め戻し後の中央陥没部に堆積したものと推される。横山英介によれば擦文時代の墓壙の調査例は相当数あり、後半のそれは伸展葬となるようである。御幸町遺跡や札前遺跡で墓壙と推定している例もこれに含まれる。勝山館や夷王山墳墓群の土壙墓は座（屈）葬を示している。洲崎館跡から珠洲擂鉢被りの頭骨が得られているが、下北の例からは伸展葬と推される。百々幸雄によれば壮年の和人男性骨である。勝山館跡の平成６年度調査区で長軸を南東・北西にとる長方形の土壙が検出さ

れた。内部に大型の礫等が集積していたが性格等は不明である。近世のアイヌ墓は伸展葬で、男女により明瞭な葬法に違いのあることが札刈遺跡などによって知られている。

本人骨は脆弱化が著しく移動、取り上げが困難であったため土壙ごと切り取りの上、取り上げた。札幌医科大学石田肇先生に現地指導をお願いした折、頂戴したご教示の幾つかを次に記す（現地で観察作業中の感想を含めた話の聞き書きであり、筆者の勘違いや誤り、先生のその後の再検討による変更などの不確定な要素の多いことを付記する）。

1『脛骨長340～350、大腿骨長400～410、大腿骨径30。下顎骨巾34、長44。眼窩30。（単位はmm）』の概数が示され、これらを含め、2『鼻骨が立体的で下顎骨の発達が著しい。上腕骨に対する尺・橈骨、大腿骨に対する脛骨の比が共に大きい。大腿骨の径が太い。』といった特徴が示された。これらのことからこの人骨は、『身長150cm余りの男性で、縄文時代以来の北海道土着の人で狩猟・採集民の特徴が見られる。系譜的にはアイヌに繋がるヒトであり、所謂和人の骨ではない。なお遺骸の姿勢は俯せである。』

本人骨は時間の経過とともに劣化が進み、発見当初の特徴や印象が薄れた状態になっていることは遺憾としなければならない。

3．中世後半の遺物と遺構

中世後半の陶磁器類が40片余り出土した。中国製の青磁・染付、国産の瀬戸・美濃大窯Ⅰ期と推される端反り灰釉皿、天目茶碗など15世紀末葉から16世紀末に至るものがある。越前擂鉢が出土していることは、居住空間として位置づけられることを示している。その中に天目茶碗や茶入れが含まれていることは、居住者やその日常生活の巾を広げるものであり、強いて言えば、町場的様相の窺われるところである。これらの遺物の大部分が調査区の北東部から出土していることは、一つには現国道の拡幅に伴って人家が両側に引き下げられているように、かつては道幅が狭く、居住区の中心が国道寄り（国道下部）にあったことを示すこと、或いはさほど密集した集落の形成がなかったことなども推し得るが、共に今後の調査をまたねばならない。

4．近世の遺物と遺構

初期伊万里など17世紀以降の遺物が漸増し、遺構の重複も増すようである。北東隅の竪穴状の遺構は勝山館跡にも見られた中世以来の建物に連なるものなのであろうか。掘立柱の柱列があり、一部建物跡の想定も試みたが、いつ頃まで掘立柱の建物がこの地域で中心的な建物であったのかも含めて更に検討しなければならない。

シャクシャインの戦いの時の蝦夷地の様子を記した「津軽一統志」は、本遺跡の所在する字上ノ国地区の戸数を「百四、五十、但し狄もあり」と記している。同書には「松前六、七百、亀田二百」ともあり、他に「福島百」が目に着くところである。古河古松軒はその「東遊雑記」に慶長の初めに勝山館（古城跡）から松前に移ったとの案内人の言を記し、松前氏五代慶広の時の上ノ国（勝山館）城代は酒井七之助と「新羅之記録」にある。文禄3年創立と伝える天ノ川河口に鎮座していた山神社や慶長元年上ノ国に檜山番所が置かれたとの伝えを併せ、寛永16年頃には檜山開発が進められていたことを「続上ノ国村史」は記しているが、その「檜木山監（ヒノキヤマブギョウ）」を松前矩広から命ぜられた明石尚政の事蹟を記す「明石系譜略伝」には「番所は官府とするのが正しく、始めは上ノ国に有り、延宝6年江差に移」したとある（続上ノ国村史）。「官府」は1514年松前に本拠を移した後、城代の置かれた「和喜之城」勝山館に付された呼称であり、檜山番所の官府はそれを引き継いでいるとも推される。延宝6（1678）年、その檜山番所が江差へ移り、以後の上ノ国は前浜でのニシン刺し網漁を中心とする漁村として推移しているものと推されるが、こうした町の移り変わりもなお解明すべき課題である。

舎（ヤマフル）と墨書きされた陶器片（*69*）は笹浪氏以前この地にあった舎小林家（久末久義氏談）の存在を実証するものとなった。層位は明らかではないが、陶製るつぼ片（*39*）、福山城からも出土している「高嶋銘」の硯などもある。

5．「上ノ国遺跡」調査の課題

「勝山館の直下に『城下町』や『町屋』がある筈」、「勝山館・花沢館・洲崎館で結ばれる三角形の地区は重要である」と指摘されて久しい。表面採集や工事の合い間の抜き取り、一部試掘調査などによって僅かずつ資料の蓄積を図ってはきた

が、中世を視野にいれた発掘調査は初めてである。明瞭な遺構の検出はなし得なかったが、15世紀末以降の遺物の出土は貴重な成果である。諸先生のご指摘の正しさが示され、今後の調査により、より正確に実証されていくと思われる。

擦文時代の遺物や墓壙の検出は、従来上ノ国町にあって調査の遅れていたこの時代に改めて目をむける機会となった。当遺跡のように海浜に選地して営まれる擦文集落の存在とその背景は道南の擦文社会の新たな一側面を示すことをも推される。既に昭和36年刊行の「竹内屋敷遺跡」の報告書で大澗湾に臨む沿岸に遺跡の点在することが指摘され、この地域の総称として「上ノ国遺跡」の名称が付された。「上ノ国遺跡」の名称と、竹内屋敷遺跡で出土している珠洲Ⅰ期の壺や擦文土器の存在は、未だ解決を見ていない擦文時代終末期の年代観やその背景を探る上での「上ノ国遺跡」の持つ重要性を示唆し続けてきたのであり、今後の調査により、その手懸りが得られる可能性を本調査で示すことができたのではあるまいか。

本調査は笹浪甲衛氏が御自宅の改築に際し、近年指摘されている「勝山館の城下町」の実体解明に先鞭をつける機会となることに快く理解を示され実現したものである。笹浪氏は江差高等学校在学中に同校考古学部員として活躍され、当町や檜山南部での昭和30年代までの主要な発掘調査に参加してきた経歴を持つことから、格別の理解を示されたものである。調査の後半、予想もしなかった擦文時代の墓壙と人骨の発見により当初予定の調査期間の大幅な延長を生じた。この結果、同氏の新居への移転は新年を跨ぐ平成８年１月も末日となってしまった。今回は氏の格別のご理解があり調査を完遂できたが、こうした事態は地域の住民の不信や、反発のもととなるものであり、文化財や遺跡の調査に対する嫌悪や忌避に連なることと言えよう。「上ノ国遺跡」の調査は、今後共継続されていかなければならないことであるが、こうしたことは、実に大きな課題である。罰則規定を如何に振り翳しても遺跡が保護できるとは思えないところである。改めて笹浪氏とご家族に感謝とお詫びを申し上げることとしたい。

出土遺物や遺構に対する検討・分析も実に粗略な内容でしかなかった。「上ノ国遺跡」の調査を継続する中でその責を果たしていく所存である。先学・諸先生の一層のご指導とご叱正をお願い申し上げ結びとしたい。（松崎）

引用・参考文献

日高地区人文科学研究報告第２集　エリモ遺跡　1953年　大場利夫　扇谷昌康　日高教育研究所
上ノ国村史　1956年　上ノ国村教育委員会
手稲遺跡　1956年　手稲町役場　手稲町教育委員会
上ノ国遺跡　1961年　上ノ国村教育委員会
続上ノ国村史　1962年　上ノ国村
東遊雑記　古川小松軒　1964年　大藤時彦
北海道爾志郡三ツ谷貝塚　1966年　大場利夫　渡辺兼庸　考古学雑誌51－４
長沼町の文化財２　長沼町幌内堂林遺跡調査報告　1967年　長沼町教育委員会
新版　考古学講座３　先史文化　1969年
新羅之記録　新北海道史　資料編７－１　1969年
津軽一統志　新北海道史　資料編７－１　1969年
北海道桧山郡宮ノ沢遺跡　1970年　渡辺兼庸他　考古学雑誌56－１
柏木川遺跡の墳墓と住居－北海道恵庭市における緊急調査－　1971年　高橋正勝編
北海道厚岸町下田ノ沢遺跡　1972年　厚岸町下田ノ沢遺跡群調査会
下北半島西通発見の人骨と陶器　1974年　森本岩太郎　橘　善光　北奥古代文化６
烏柵舞　1975年　ウサクマイ遺跡研究会編
元和　1976年　乙部町教育委員会
ウサクマイ遺跡Ｎ地点発掘報告書　1977年　千歳市教育委員会
青苗遺跡発掘調査概報　1978年　奥尻町教育委員会
季刊どるめん　22号　1979年
日本先史土器の縄文　1979年　山内清男
アイヌ考古学　1980年　宇田川洋
奥尻島青苗遺跡　1981年　奥尻町教育委員会
斜里町文化財調査報告Ⅰ　須藤遺跡　1981年　斜里町教育委員会
縄文文化の研究　４　縄文土器　1981年
北海道洲崎館跡発見の中世遺物と頭骨　1981年　松崎水穂　百々幸雄　中村公宣　考古学雑誌67－２
擦文文化　1982年　藤本　強
萩ケ丘遺跡　1982年　北海道江別市教育委員会
北海道洲崎館発見の一中世頭骨　1982年　百々幸雄他　人類学雑誌90－１
上ノ国漁港遺跡－昭和58年度発掘調査概報－　1984年　上ノ国町教育委員会
国内出土の肥前陶磁　1984年　佐賀県立九州陶磁文化館
北方考古学の研究　1984年　菊池徹夫
札前　1985年　松前町教育委員会
御幸町　1985年　森町教育委員会
大岱沢Ａ遺跡　1987年　上ノ国町教育委員会
上ノ国漁港遺跡　1987年　上ノ国町教育委員会
新村４遺跡　1987年　上ノ国町教育委員会
釧路市材木町５遺跡調査報告書　1989年　北海道釧路市埋蔵文化財調査センター
日本陶磁大系第７巻　常滑　渥美　越前　珠洲　1989年
日本陶磁大系第８巻　信楽　伊賀　1989年
日本陶磁大系第11巻　志野　黄瀬戸　瀬戸黒　1989年
日本陶磁大系第13巻　唐津　1989年
日本陶磁大系第19巻　伊万里　1989年
考古学ライブラリー59　擦文文化　1990年　横山英介
火山灰アトラス「日本列島とその周辺」　1992年　町田　洋　新井房夫
瀬戸市史　陶磁史編四　1993年　瀬戸市史編纂委員会
上ノ国町勝山館関連遺跡調査報告　1994年　市村高男
概説　中世の土器・陶磁器　1995年　中世土器研究会
史跡上ノ国勝山館跡発掘調査概報Ⅰ～Ⅻ　1980～1995年　上ノ国町教育委員会

PL. 1 遺構検出状況（全景、土壙1・7・8・16・23）・遺物出土状況

1. 遺跡北半部完掘（南より）

2. 遺跡南半部完掘（南より）

3. 土壙7　検出状況（北より）

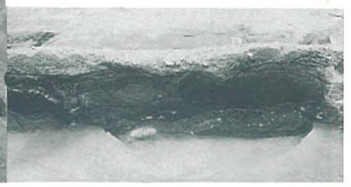
4. 土壙23　溝、木質部検出状況（東より）

5. 土壙23　木質部（東より）

6. 土壙23　土層推積（東より）

7. 土壙8　焼土検出状況（北より）

8. 土壙1　完掘（東より）



9. 土壙1　土層堆積（東より）

10. 土壙16　完掘（西より）

11. 土壙16　土層堆積（西より）

12. 土壙16　上面Ⅲ層堆積（東より）

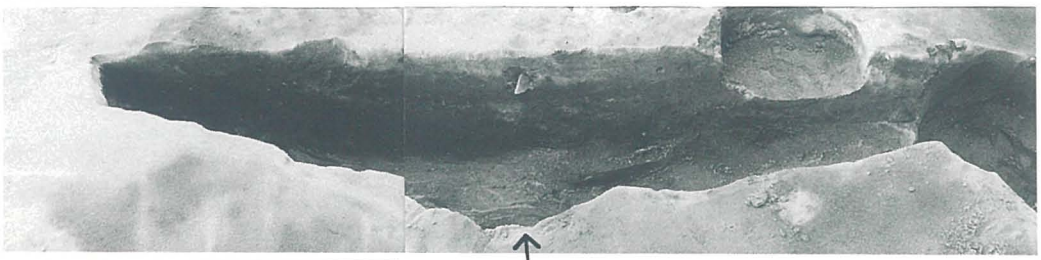
13. 遺物出土状況（銅鏡・北西より）

14. 遺物出土状況（擦文土器・西より）

15. 遺物出土状況（縄文土器・西より）

1 擦文土壙墓検出状況（西より）

2 擦文土壙墓検出状況（北より）

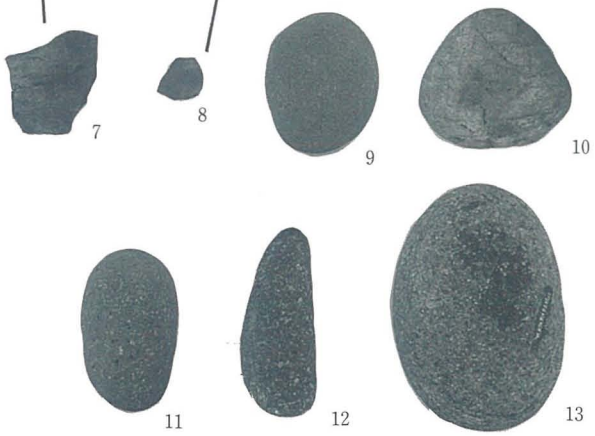


3 擦文土壙墓南壁土層堆積

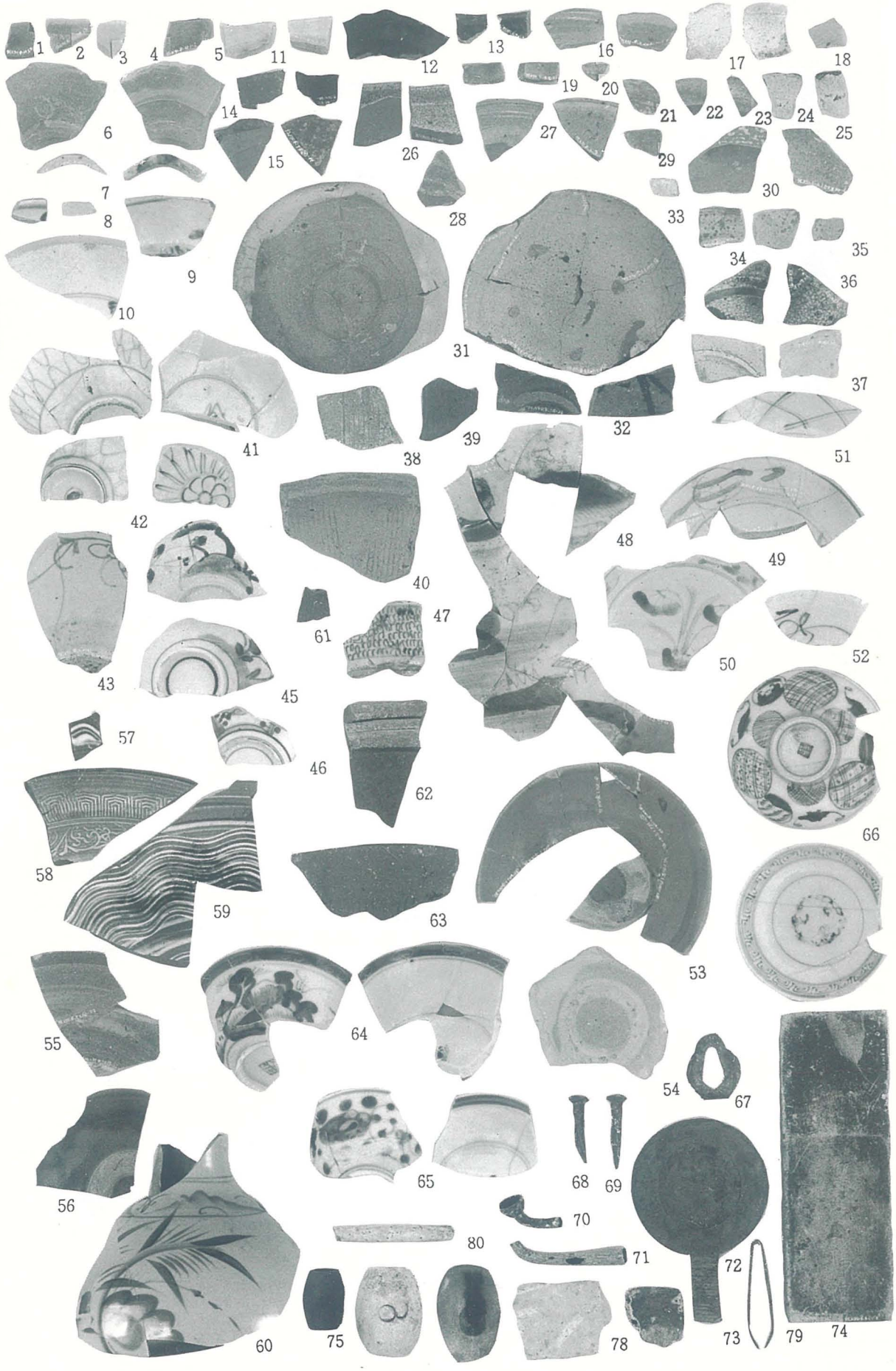
4 擦文人骨頭部（北西より）

5 擦文・土壙墓土器出土状況（北西より）

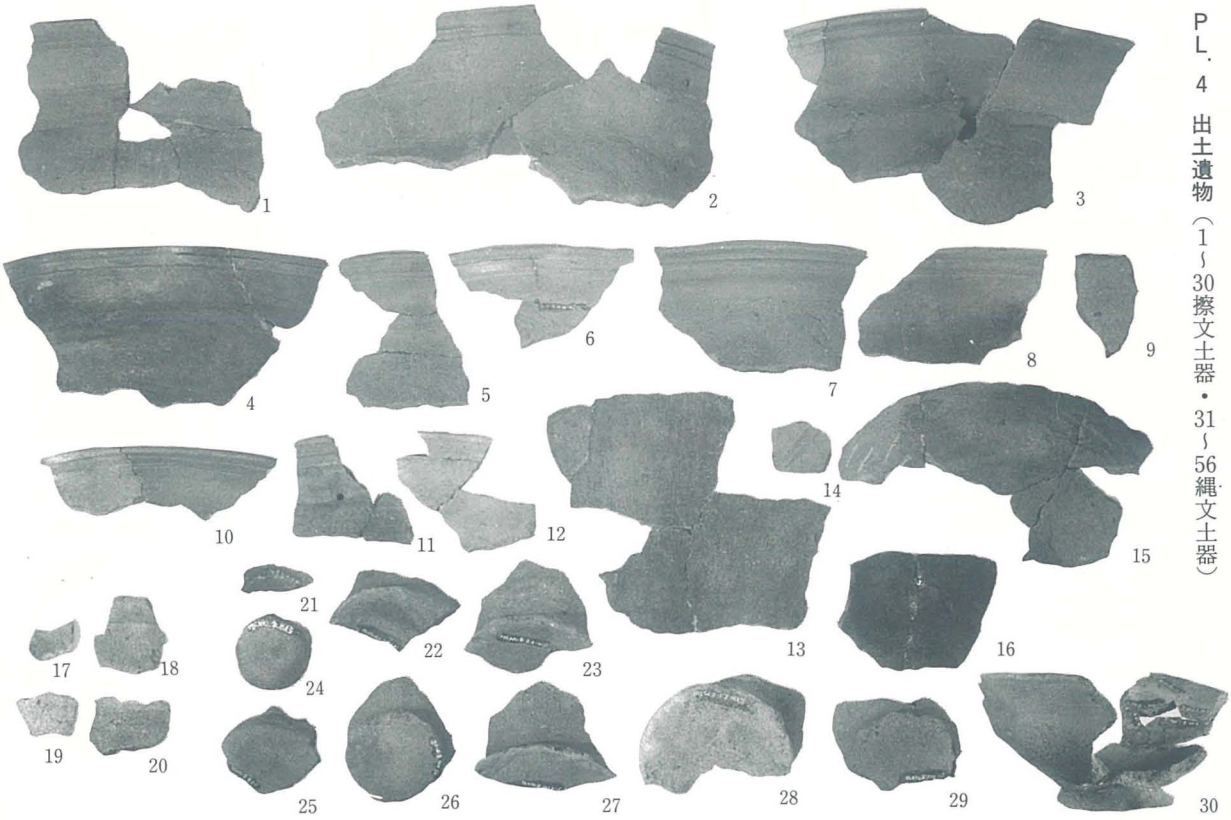
6 擦文人骨膝部（南西より）

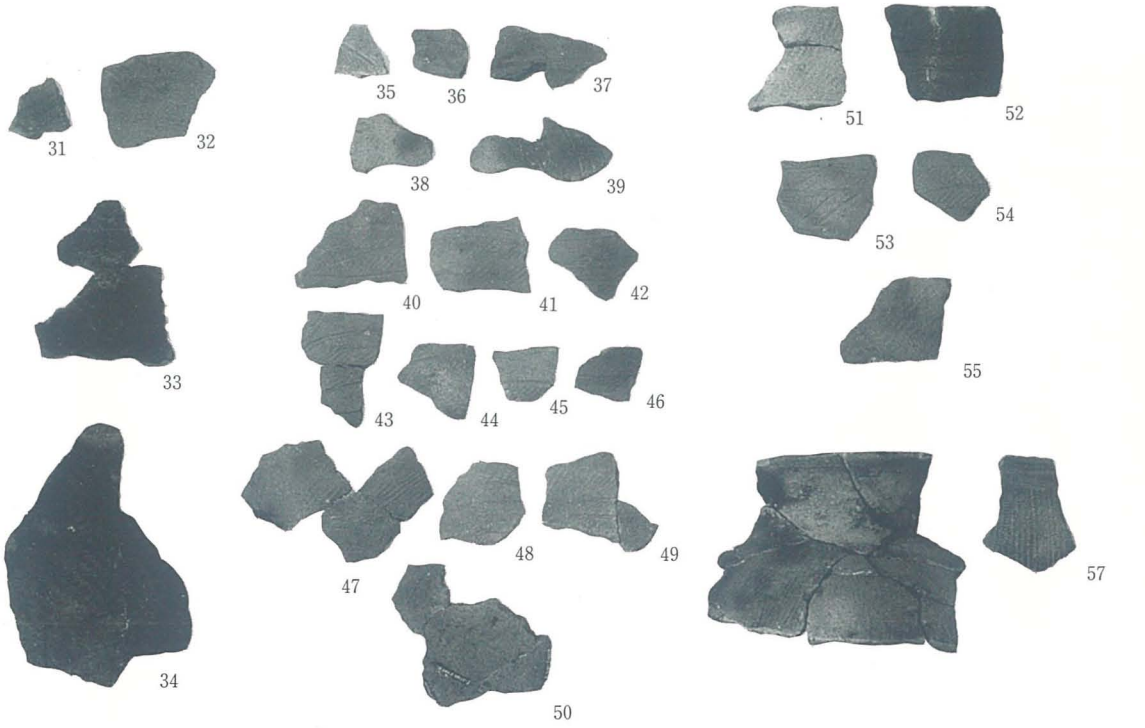


PL. 3 出土遺物（中近世陶磁器他）



PL. 4 出土遺物（1～30擦文土器・31～56縄文土器）





笹浪屋敷遺跡

—上ノ国市街地遺跡発掘調査概報Ⅰ—

発　行　上ノ国町教育委員会

北海道桧山郡上ノ国町字大留100

印　刷　平成８年３月26日

発　行　平成８年３月29日

印刷所　㈱北海道機関紙印刷所

表紙写真提供㈲ヨコノ印刷

平成８年４月15日　桧山考古学研究会

（桧山郡上ノ国町字上ノ国274　上ノ国町郷土館内）増刷発行